

金井紫雲編

藝洲資料

章魚・烏賊・海月



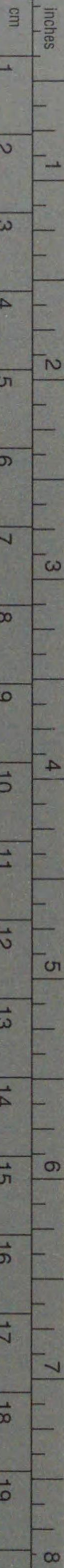
第四期 第六册

K231

35

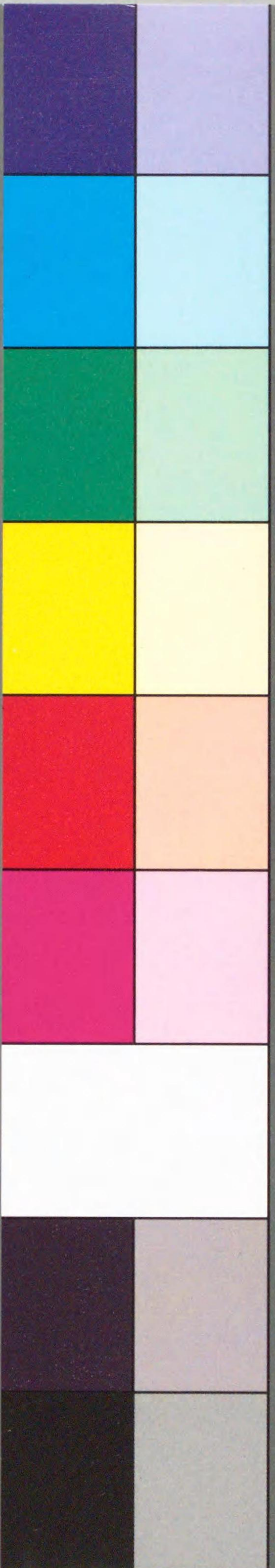


81457863



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

藝術資料

第四期
魚介蟲類篇

第六冊 『章魚・烏賊・海月』

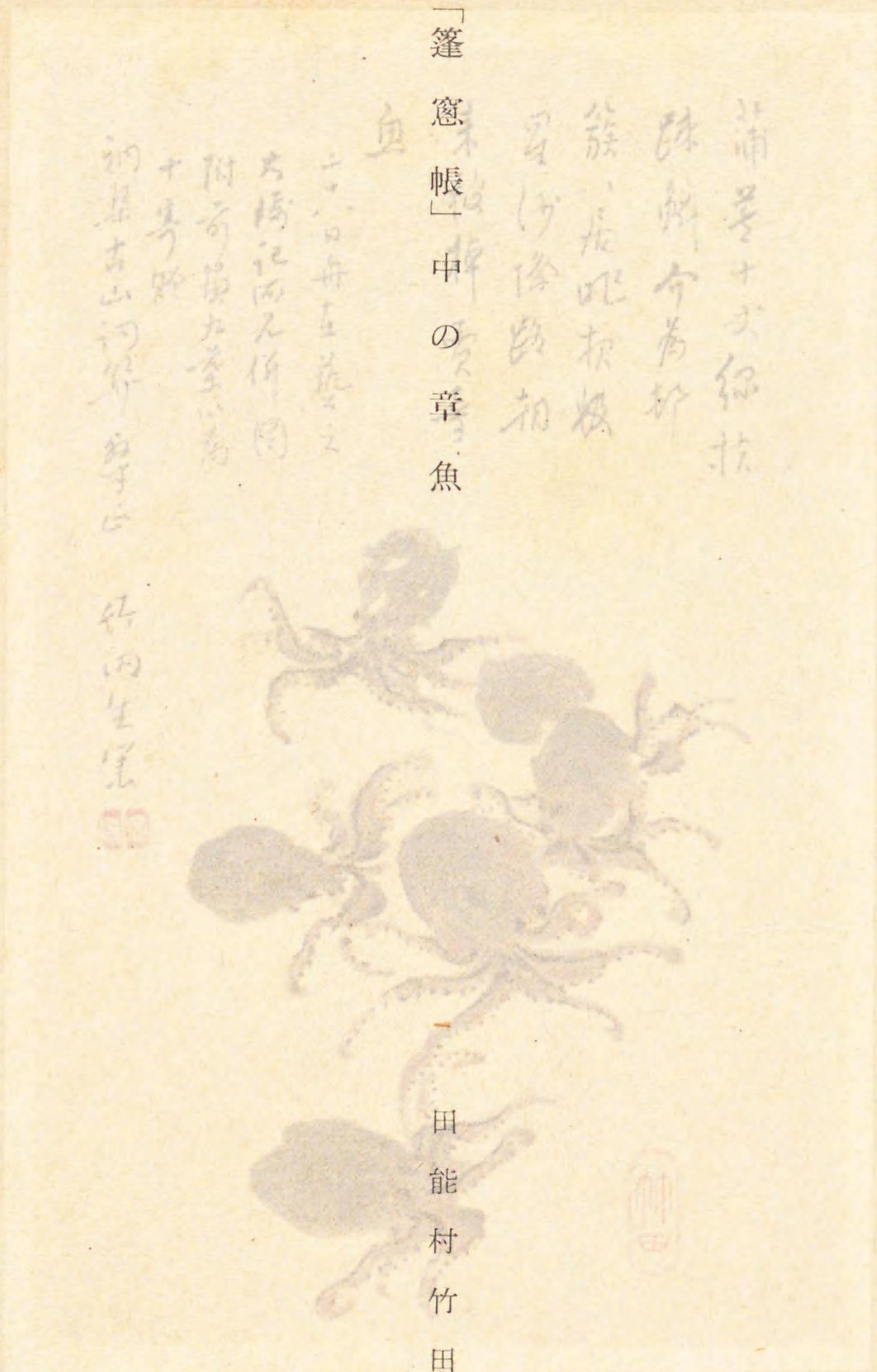
目次

口繪

- 田能村竹田筆 章魚圖(原色版)
- 伊藤若冲筆 游魚圖中の章魚(玻璃版)
- 菱川師宣筆 臺所圖の章魚洗
- 歌川豊國筆 光氏磯邊遊圖
- 揚州周延筆 相海蛸捕之圖
- 一勇齋國芳筆 章魚短冊繪
- 長澤蘆雪筆 章魚
- 鋏形蕙齋筆 略畫式の章魚
- 柴田是真筆 章魚と烏賊
- 川村曼舟筆 移る潮
- 落合朗風筆 章魚圖
- 山本天章筆 蛸壺
- 池上秀畝筆 貝闕嬉春圖
- 川端龍子筆 「太平洋」の海月と烏賊
- 落合朗風筆 クラゲ遊ぶ
- 越中滑川の成章魚 諸國名産圖會所載 (扉)

本文

| | |
|-----------------------|----|
| 章魚の概説 | 二 |
| 章魚の文獻抄 | 三 |
| 章魚の習性 | 六 |
| 章魚の戀愛 | 二 |
| 章魚六題 | 三 |
| 出雲のたこ島、蛸薬師、忠臣藏の章魚、蛸船 | |
| 蛸枕、百魚譜の章魚、クレタの蛸壺 | |
| 章魚の奇譚 | 一五 |
| 七足の章魚、大蛸牛を捕ふ、大蛇と闘ふ大蛸 | |
| 手長章魚、蛸足の商ひ | |
| 蛇蛸と化す話 | 一八 |
| 狂言「蛸」 | 二〇 |
| 烏賊の種類 | 二二 |
| 烏賊雑考 | 二三 |
| 隨筆に現はれた烏賊 | 三五 |
| 烏賊の墨、大烏賊、大烏賊乗込、消ゆる烏賊墨 | |
| 淵鑑類函所載の烏賊 | 二六 |
| 烏賊の繪 | 二六 |
| くらげ | 二七 |
| 海月の傳説 | 三〇 |
| 海月の詩と歌 | 三一 |
| 章魚、烏賊、海月の俳句 | 三三 |



「篷窓帳」中の章魚

田能村竹田筆

浦島太郎の絵
 藤原朝経の絵
 星沙路の絵
 大橋記の絵
 附前屋の絵
 十景の絵
 初集古山の絵

藝術資料

第四期
魚介蟲類篇

第六冊 『章魚・烏賊・海月』

目次

口繪

| | |
|-----------|--------------|
| 田能村竹田筆 | 章魚圖(原色版) |
| 伊藤若冲筆 | 游魚圖中の章魚(玻璃版) |
| 菱川師宣筆 | 臺所圖の章魚洗 |
| 歌川豊國筆 | 光氏磯邊遊圖 |
| 揚州周延筆 | 相海蛸捕之圖 |
| 一勇齋國芳筆 | 章魚短冊繪 |
| 長澤蘆雪筆 | 章魚 |
| 鋏形蕙齋筆 | 略畫式の章魚 |
| 柴田是真筆 | 章魚と烏賊 |
| 川村曼舟筆 | 移る潮 |
| 落合朗風筆 | 章魚圖 |
| 山本天章筆 | 蛸壺 |
| 池上秀畝筆 | 貝闕嬉春圖 |
| 川端龍子筆 | 「太平洋」の海月と烏賊 |
| 落合朗風筆 | クラゲ遊ぶ |
| クレタ島出土の蛸壺 | |
| 越中滑川の成章魚 | 諸國名産圖會所載(扉) |

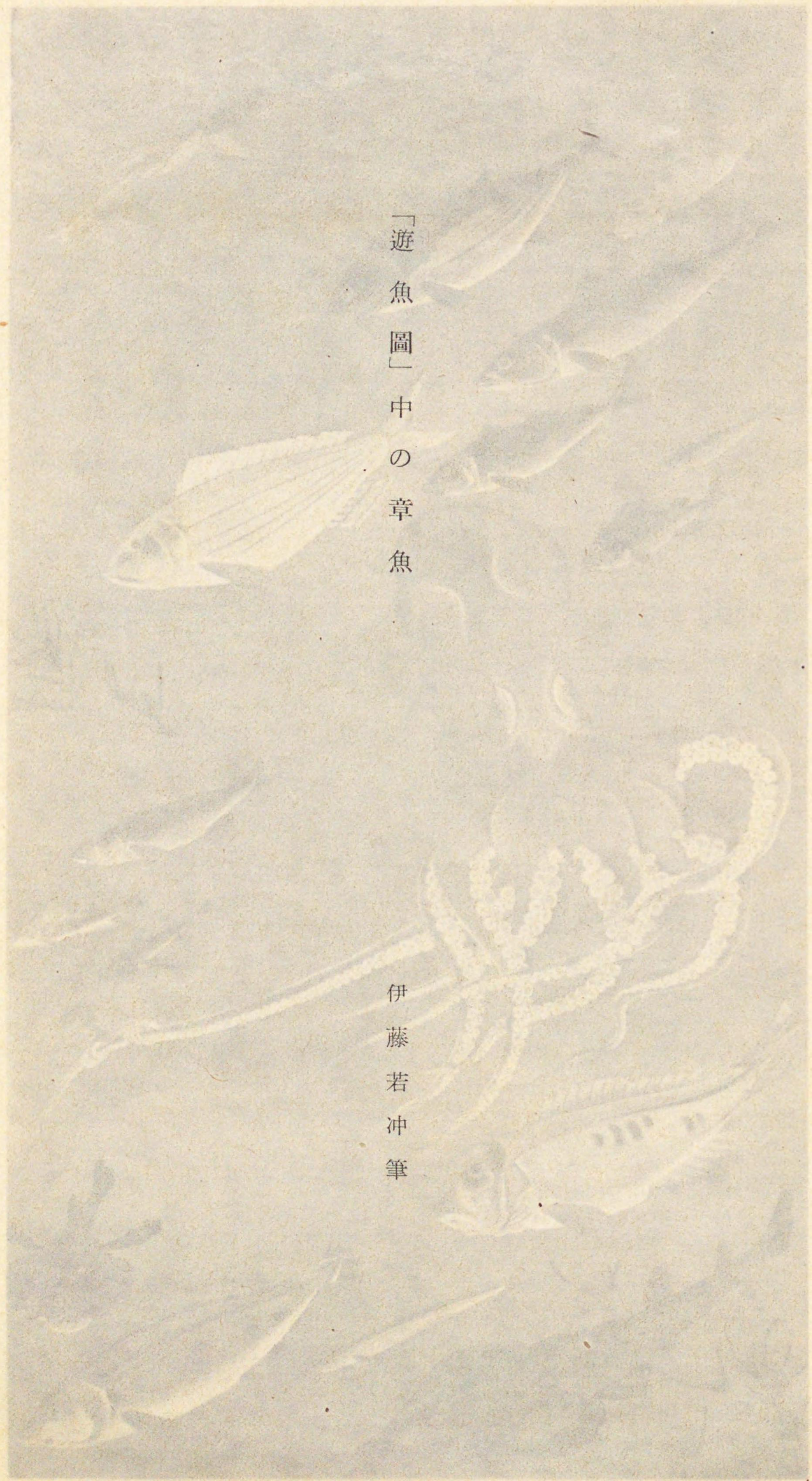
本文

| | |
|--|----|
| 章魚の概説 | 二 |
| 章魚の文獻抄 | 三 |
| 章魚の習性 | 六 |
| 章魚の戀愛 | 二 |
| 章魚六題 | 三 |
| 出雲のたこ島、蛸薬師、忠臣藏の章魚、蛸船 蛸枕、百魚譜の章魚、クレタの蛸壺 | 一五 |
| 章魚の奇譚 | 一五 |
| 七足の章魚、大蛸牛を捕ふ、大蛇と闘ふ大蛸 手長章魚、蛸足の商ひ | 一五 |
| 蛇蛸と化す話 | 一八 |
| 狂言「蛸」 | 二〇 |
| 烏賊の種類 | 二二 |
| 烏賊雑考 | 二二 |
| 隨筆に現はれた烏賊 | 二三 |
| 烏賊の墨、大烏賊、大烏賊乗込、消ゆる烏賊墨 | 二五 |
| 淵鑑類函所載の烏賊 | 二六 |
| 烏賊の繪 | 二六 |
| くらげ | 二七 |
| 海月の傳説 | 三〇 |
| 海月の詩と歌 | 三一 |
| 章魚、烏賊、海月の俳句 | 三三 |

「篷窓帳」中の章魚

田能村竹田筆



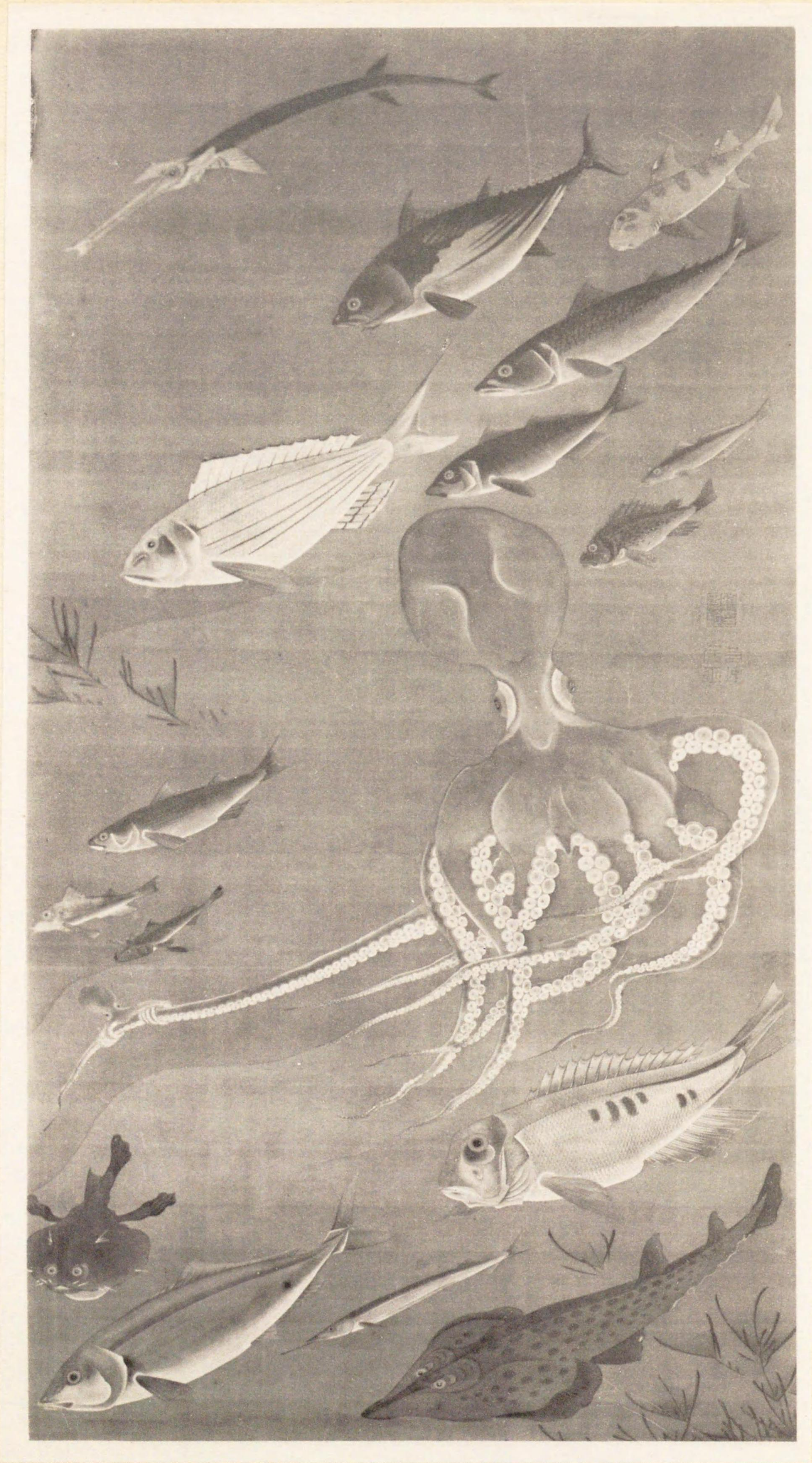


「遊魚圖」中の章魚

伊藤若冲筆

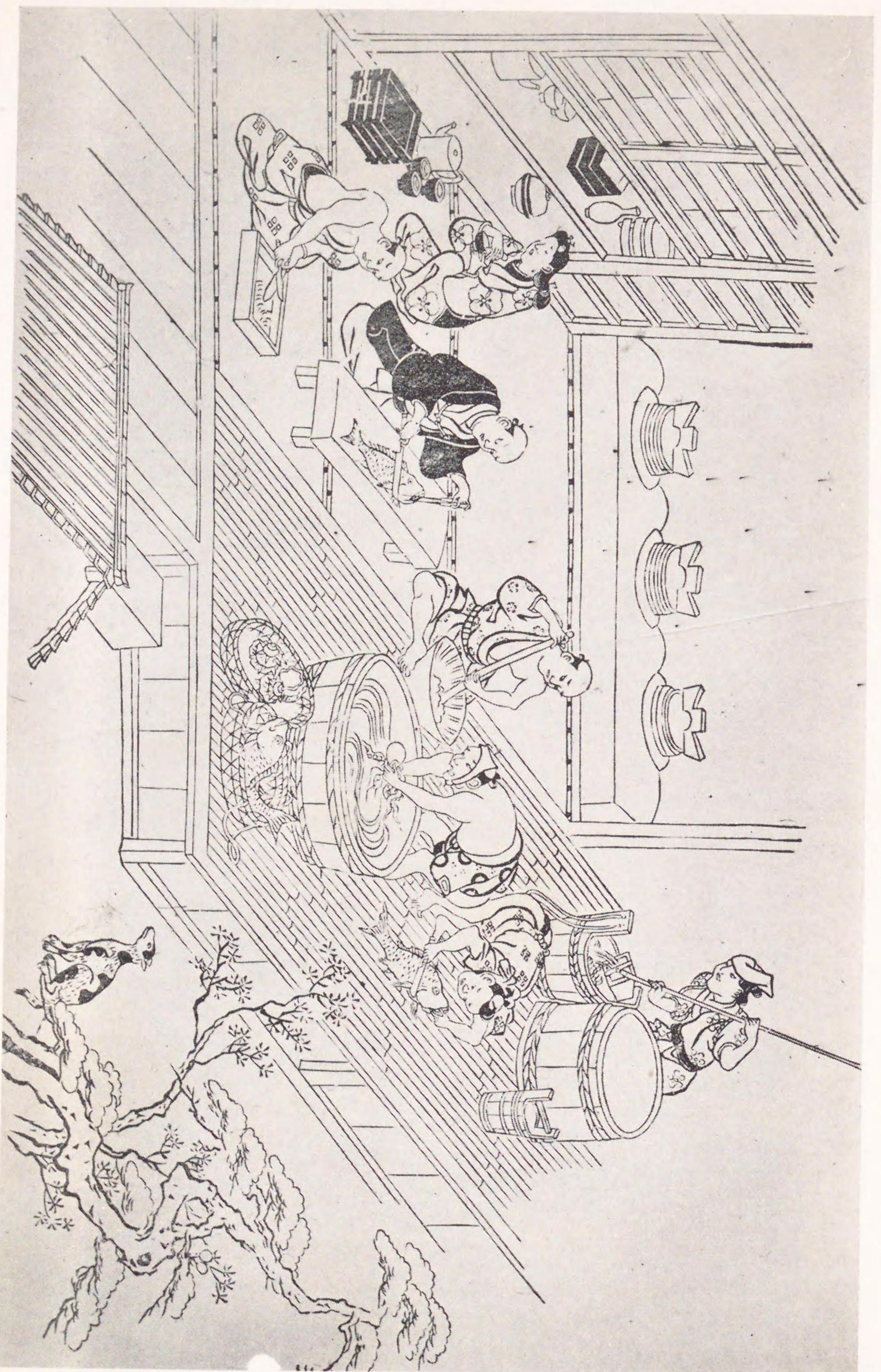
「遊魚圖」中の章魚

伊藤若冲筆



「魚類圖」中の章魚

柏葉書中筆



筆 宣 師 川 菱

(ひ 洗 魚 草) 圖 の 所 家



華國豐川歌

圖之遊磯氏光



揚洲周延筆

相海蛸取の圖





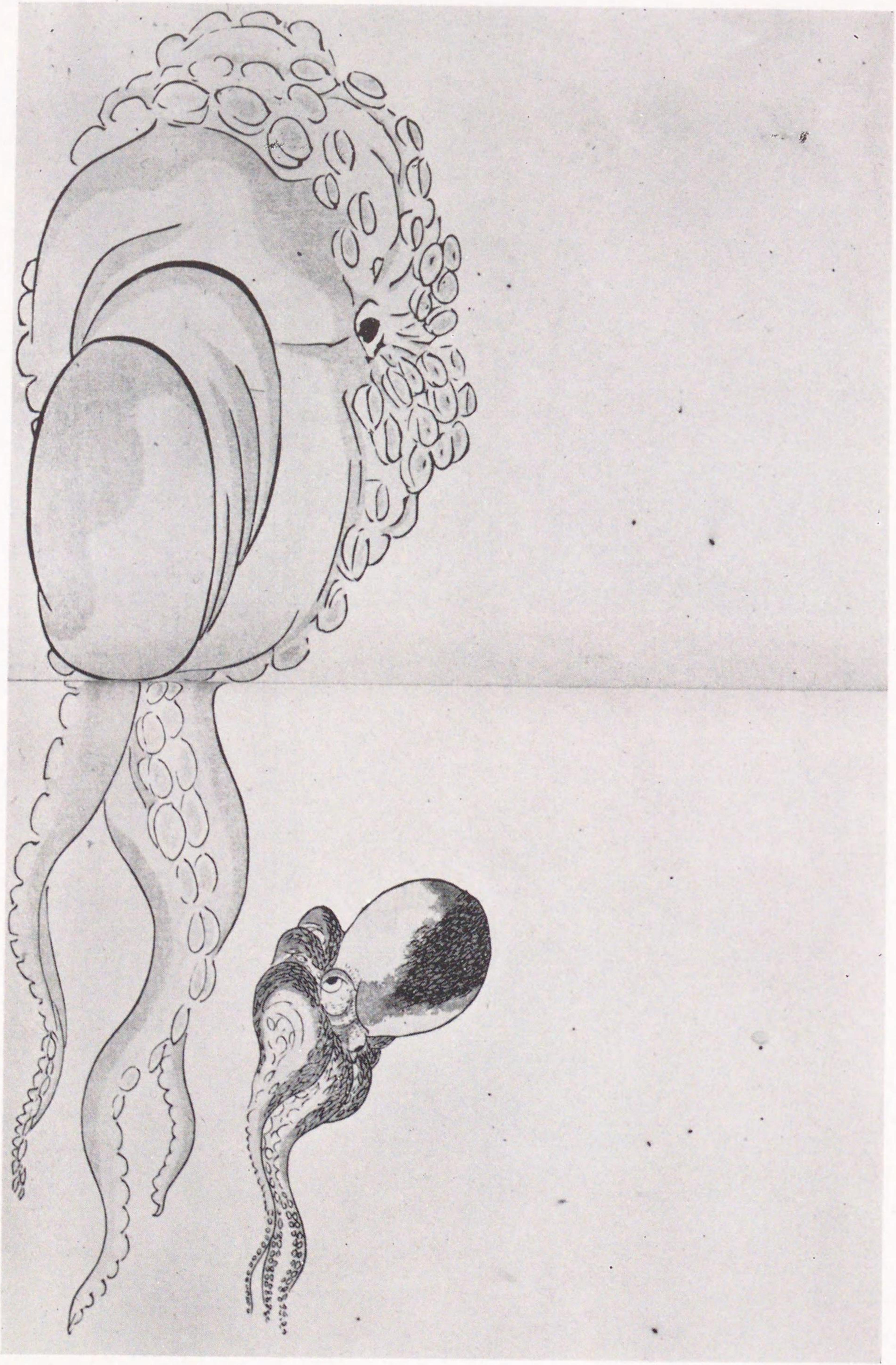
章魚と游魚

一勇齋國芳筆



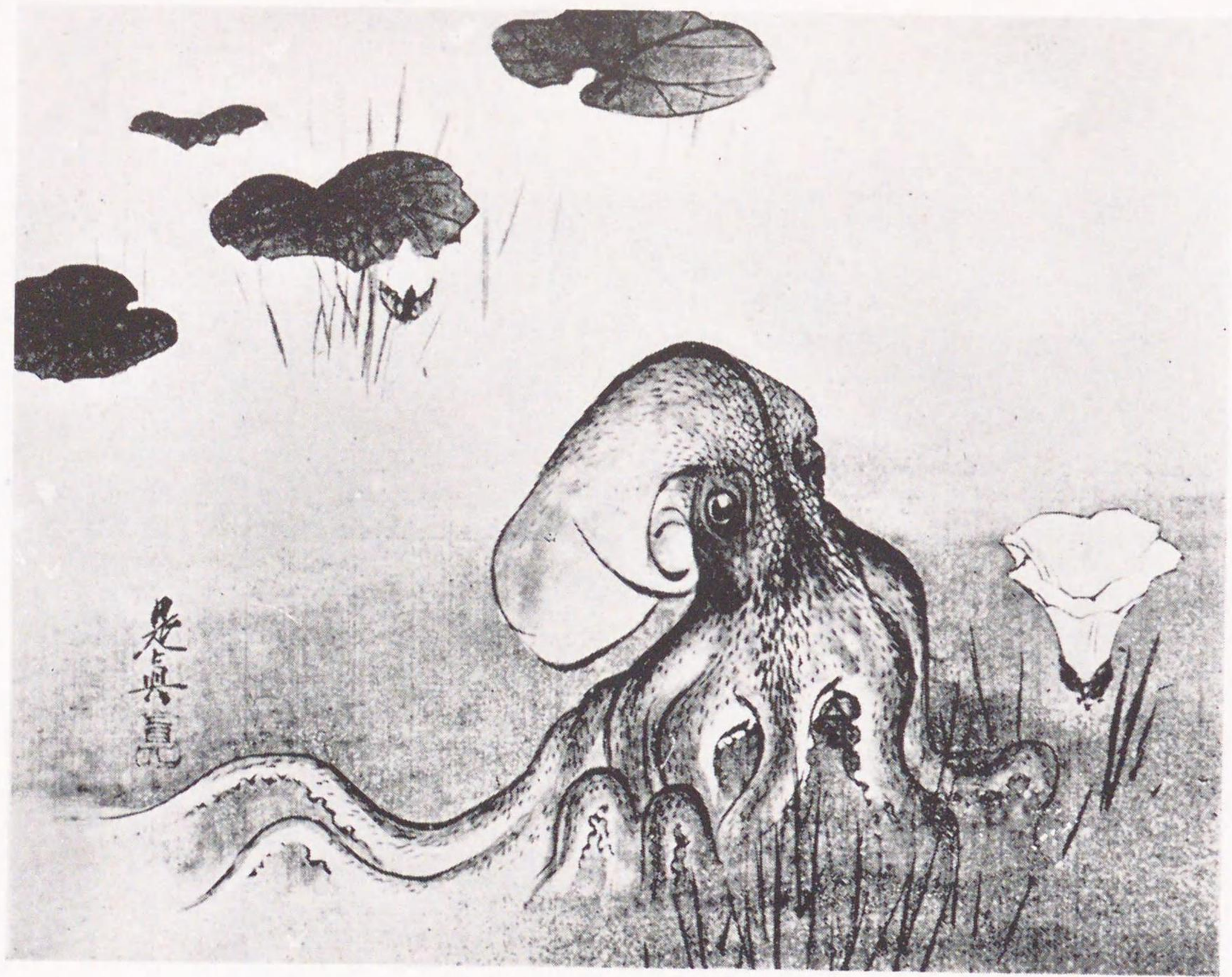
章
魚
圖

長
澤
蘆
雪
筆



筆齋惠形錄

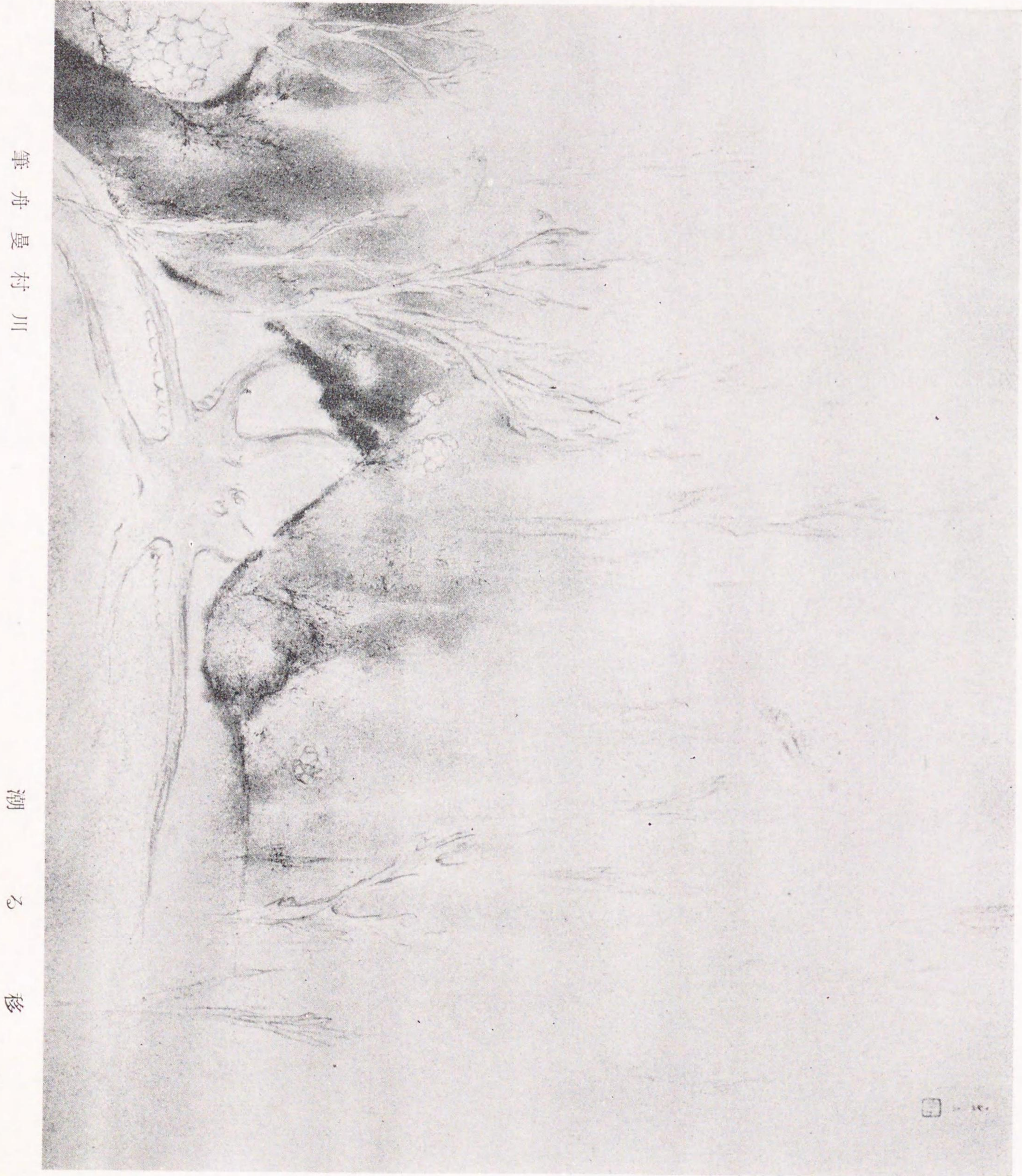
(載所式畫略) 圖 魚 章



章魚と鳥賊



柴田是真筆



川村曼舟筆

移心之湖

川村曼舟筆

移心之湖

筆風朗合落

魚章





筆 草 天 本 山

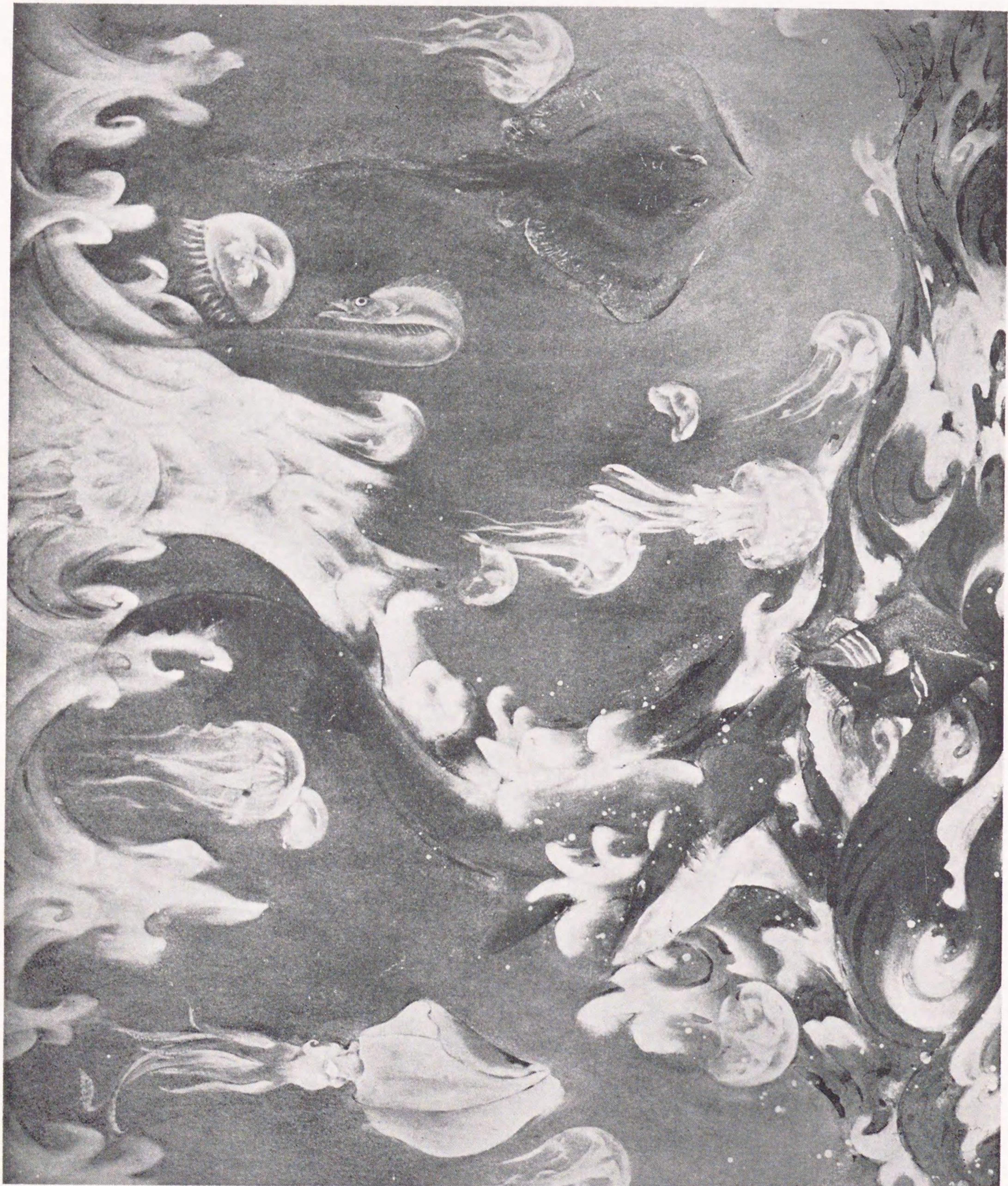


壺 箱



筆 敏 秀 上 池

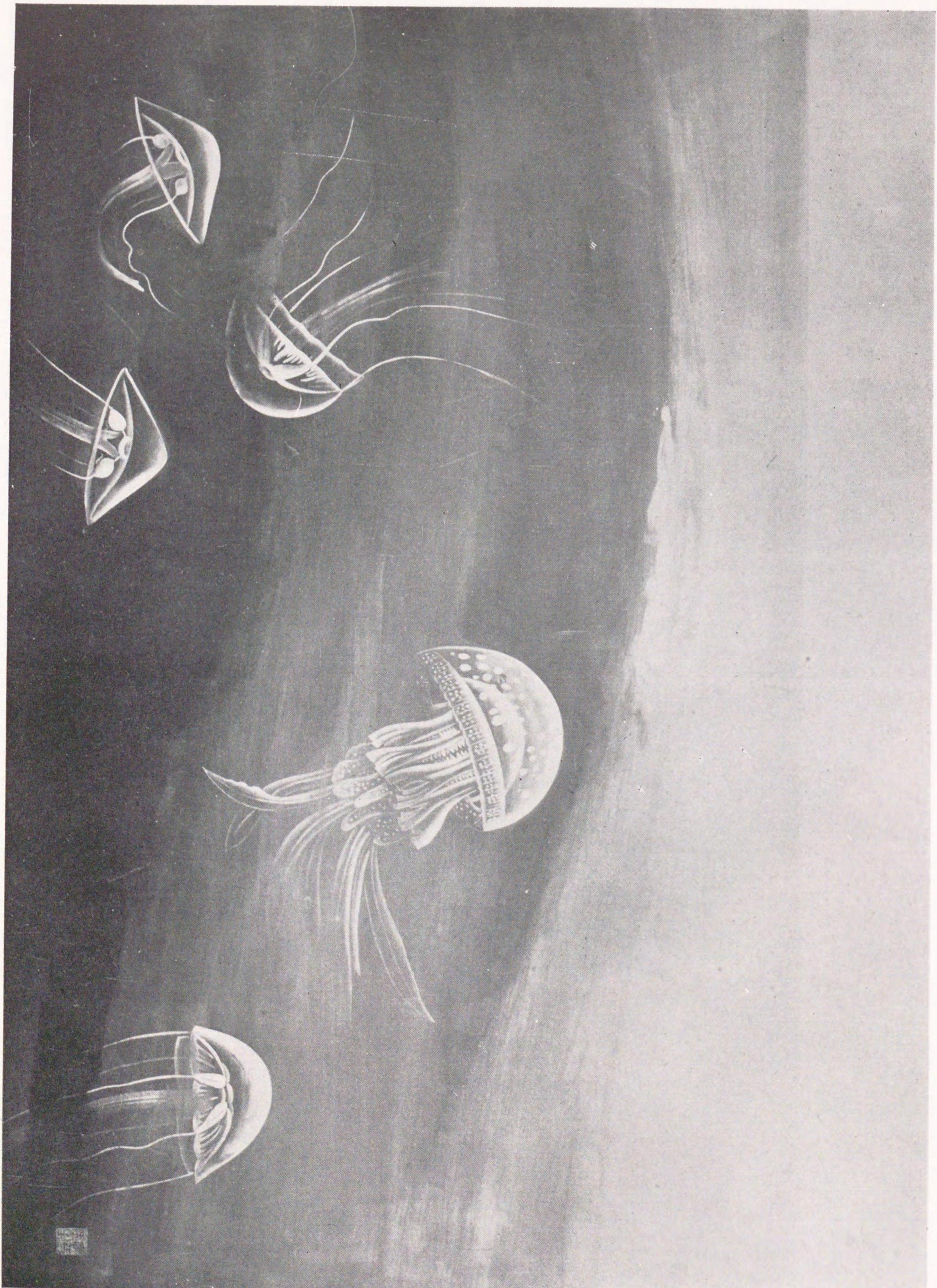
春 燈 圖 貝



筆子龍端川

(月海と駿鳥の中巻龍) 洋平太

筆風朋合落



ぶ遊げらく





品土出島タレク

壺の魚章

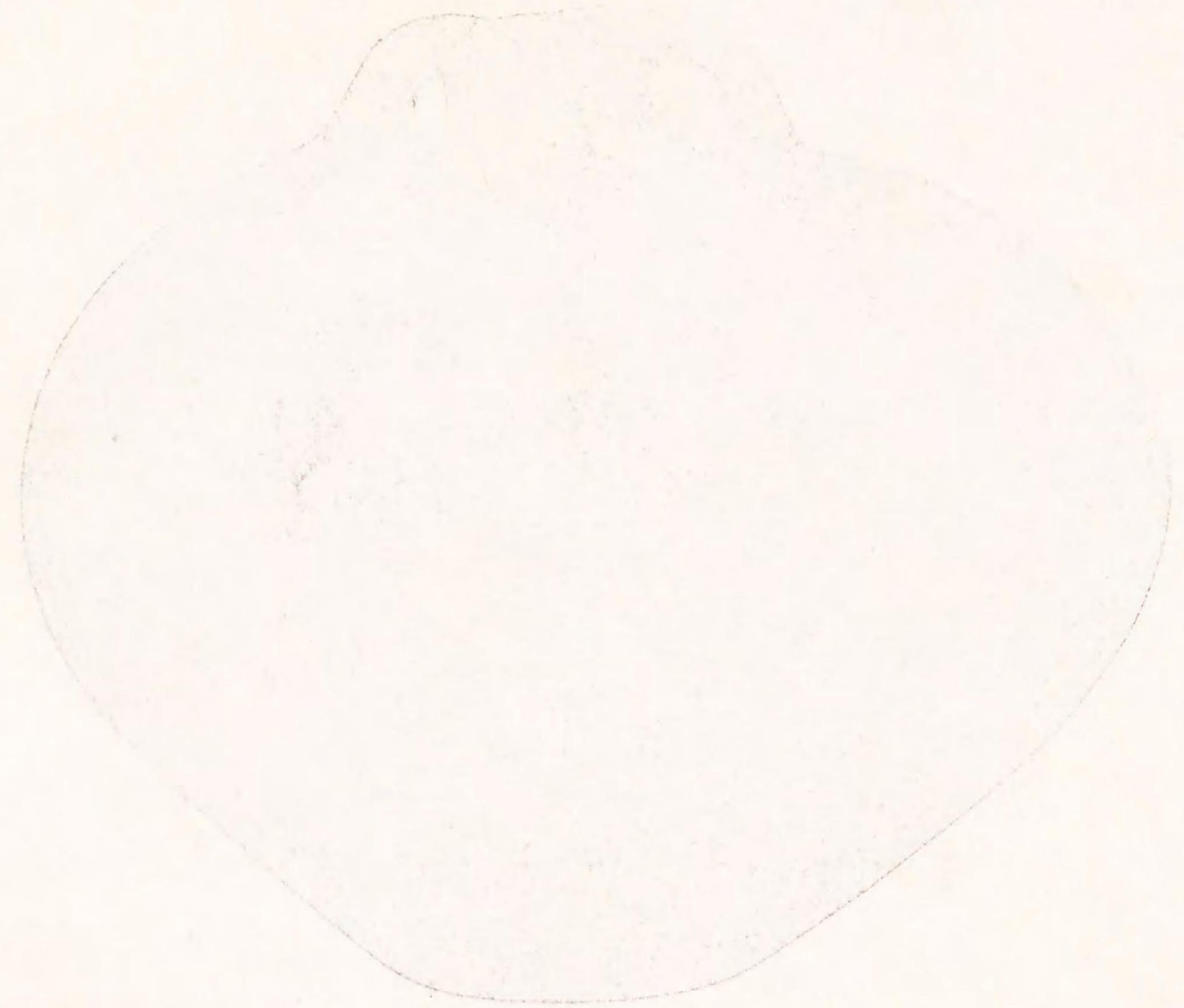
編雲紫井金

料資州藝

册六第 篇類蟲介魚 期四第
月海・賊烏・魚章



行刊堂艸芸 會社名



章魚の概説



本邦に産するたこの種類として知られたるものに、まだこ、いひだこ、てながだこ、くらげだこあり。

まだこ 蛸 章魚 異名たこ

動物學上の位置、まだこは、たこ科に屬するたこの一種にして動物學上左の位置にあり

界：動物界 門：軟體動物 亞門：管足類 綱：頭足綱 目：二鰓目 亞目：八腕亞目 科：たこ科 屬：たこ屬 種：まだこ

形態 軀幹は短少にて圓く、八個の觸脚は軀幹に比すれば甚だ長く、其根基は膜を以て連接し、其先端は尖銳なり、觸脚には二列の吸盤あり、眼は二個ありて大なり、雄は第三觸脚の先端溝狀の交接器に變じ先端尖らず。

體色は周圍の狀態に従ひて變化す、又静止する時と運動する時に於て多少體色を異にするも概ね紫褐色又は灰色にして白色の斑點あることあり、皮膚平滑にして體長五寸餘、觸脚の長さ二尺に達す。

習性 平素淡水の注入せざる五、六尋乃至四、五十尋の近海岩礁の邊に棲息し、晝間は其内に潛入し、夜間は出でて盛に活動をなし、觸脚を以て魚類、甲殻類を捕食す、而も害敵に遭遇するときは、忽ち墨汁を放射して踪跡を晦ます。

たこの游泳の方法は體の後部を上方にし、觸脚を斜に垂れて、噴水孔を下方に向て水を排除し其反動力によりて後進す、又静止するか又歩行するに當りては、觸脚を以て他物に攀ぢ體軀を後方に垂る、交接期は夏期にして産卵期は七八月頃なり、卵は膠質の包被を被り、葡萄の房狀をなし、岩礁又は海藻下に産出せらる。(下略)

いひだこ 飯蛸

動物學上の位置 いひだこはたこ科に屬するたこの一種にして概ね小形なり動物學上左の位置にあり。(科以前はまだこ同一につき省略す)

—水産動物植物精義—

章魚の文献抄

重修本草綱目啓蒙

章魚、タコ、セキダコ(筑前大者)一名河北小吏(典籍便覽)、章鯨、章拒(共同上)、章巨(寧波府志)、紅舉(閩書)、滄浪頭(水族加恩簿)、望潮魚(廣輿記)、八梢魚(東醫寶鑑)、文魚(同上)、章花魚(正字通)、海和尚(山東通志、同名あり)。

京師に來り、市もの皆播州二見浦にて漁し攝州兵庫より送る、兵庫にては漁せず、採る法は長繩に長瓦壺(タコツボと呼ぶ)中に紅帛片及紅熟蕃椒少許入れたるもの數箇を連接し海底に沈め置く時は、必らず章魚壺中に入て出でず、陸に引擧ても敢へて出でず、指爪を以て壺底を搔く時は、便ち皆走り出づ、その壺久しく用ふる者は外に蠟殼及小介粘着して異形をなす、好事家用ゐて花尊とす、薩州にて用ふる者は、磁壺にして底に大孔あり、章魚は身小にして八足長大なり、足に疣あり、

二道に相並で釘の如し、釘ごとに竅あり、色は白くして微紅を帯ぶ、又全く赤皮なるものあり双眼及口皆足上にあり、腿黄中間白皮中に鳶鳥の形なる骨を包みて臍の如し、形色烏賊魚の鳶鳥と同じく大なり、腹は袋の如し、肉薄味亦佳ならず、俗にドウビンと云ふ、章魚の大なるものは八九尺或は一二丈にして雞犬を捉食ひ人手を捕るものあり、或は海中より足をのべて船中の人の有無をさぐることもあり、小なるものも夜中陸に上り、腹を上にして足を下にして健走すること飛ぶが如くして菜圃に入り茄をつみ芋を掘り食ふ、晝にても人なきときは出づといふ、若州加州等北地には尋常の小なるものなし、皆大足のみを賣る、徑三四寸なるものありといふ、乾タコ全く暴乾するものあり、多くは石距なり、長さ七八尺なるものあり、又刮り薄片となすものあり、色潔白なり、讚州より出づ、子を藤のはなと云ふ、播州の二見名産なり、二三寸の長さの

絲の如き者に粟粒に似たる者多く簇り連りて櫛の花穂に似たり、黃白色なり、鹽藏して遠に送る、湯となして珍とす、此を海藤花と云ふ。一種小タコは十月ごろ多く京師に來る、故に十夜ダコと云ふ、東醫寶鑑の小八梢魚俗名絡蹄なり、一種イ、ダコは江戸になし、攝州泉州播州の海濱にて多く取る、絡蹄より小く足共に長さ五七寸或は二三寸、腹内に白米飯の如くなるもの充滿す、柑瓢の形の如し、俗に飯と呼ぶ、漳州府志にも俗爲飯と云ふ、全く煮食味美なり、十二月より出づ、春中盛なり三月に至れば味頓に減ず、或は糟藏し或は鹽漬として遠に送る者は味鮮なる者に劣れり、源順はこれを貝蛸と云ふ、是閩書の鱈魚一名望潮魚なり、備前の片上には絡蹄の大きなる者あり、その地の名産にして、他所になし、紅螺殼にてとると云ふ、この飯大なる故に切りて食ふ、一種クモダコは形狀イ、ダコと同くして腹小く空くして飯なし、是細長にして蜘蛛の如し、小さな者は一寸許、丹後、但州、越前、加州多くとる、華夷蟲魚考、寧波府志典籍便覽の望潮一名塗蟻なり、勢州津に

K231
35

て、アナダコと云ふは形小くしてイ、ダコの如くなれども飯なしイ、ダコより後れて出づ毒あり食へば必ず酔ふ是又一種なり、クモダコとい、ダコとは雌雄の如くなれども國によりて有無あれば、別種なるべし、一種アシナガダコは一名テナガダコ、マンブク(防州)クテナハダコ(雲州)形・章魚に同じくして足最も長し、食へば必ず酔ひ、又斑を發す、是石距なり、一名石拒(寧波府志)、八帶魚(東醫寶鑑、漳州府志)八則魚(山東通志)雲州及讚州にては石距は蛇の化すところと云ふ、蛇化のと若州に多し、筑前にてはイ、ダコの九足なるものは蛇化と云ふ、八足の正中に一足あるを云ふ、石距の子をシメダコ(攝州)と云ふ。

本朝食鑑

蛸魚、訓多胡、釋名蛸(式)海蛸子、(源順)大者名海肌子。
集解、海上處々多有、采之無時、大者入網或漁人用小片板、表著鈎裏著烏賊骨及鱧魚等、而泛水則蛸乘板上、隨餌至岸驚欲逃而掛鈎或以繩絆磁壺、一繩連二三壺、

投于水中、久而小蛸入壺來矣、狀似烏賊而大、八足多疣子、色白帶微赤、或赤皮者亦有、眼口有腹下足上、八腿交股之中間白皮中有如雙小鳥之骨子、又如菱實之小而黑色、或形一如鴛鴦、故俗號鴛鴦也、其腹似袋肉薄味不佳、但足肉多味亦美不宣生食、宜煮食、若漫煮之則肉硬勞齒牙、故先以菜蔬根牛房根、答之七八次、而煮則軟美倍常、或用煎茶水而煮熟亦好、或先煮熟取出懸北窓、以風者五六刻時、復煮熟則軟美而可也、以味噌汁煮熟者久亦可、冬月先煮之露宿而凍則軟寒而味佳、又煮之亦可也、漁市曝乾貨之呼曰子蛸、延喜式主計部有蛸蛸膳、大膳有子蛸、隱岐伊豫讚岐、貢乾蛸、華人生以薑醋食、謂味如水母、是不鍛煉其調和乎、本朝之人煮熟以薑醋食之、味不減、鯨魚此韓愈所謂章舉也、大者八九尺及一二丈、若斯者長足卷取人入水而食、其足疣當人之肌膚、則吮血甚急、故不待水沒而乍斃焉、捕犬鼠猿鳥亦然、或夜出水上岸、捧腹昂頭怒目踏其八足、捷走如飛入田圃、掘芋而食、田夫夜見之而驚叫爲

怪、日中亦無人則出矣、或田夫竊視之用長竿而撥獲之亦有焉、今後越海及佐渡海上風靜潮平時、倏忽遙視巨人立波上、其容如浮屠、高大而頭撐蒼穹、呼稱海法師、海俗謂是大章舉之所化也、大抵佐渡及出羽之海采、大蛸魚、乾曝之以傳送于難波市、及二三丈者多、其頭懸于樓上高欄、則是垂掃地是害人之物乎、一種有身小足長細、呼曰足長蛸、味亦不佳即石拒乎。

大和本草

章魚、大ダコ、小ダコ、クモダコ、イ、ダコあり、海中にて人にすひ付てはなれず、血いづ、人の唾を以て落すによく落つ、(中略)但馬にある大ダコは甚大なり、或牛馬を取り又夜泊の小舟に手をのべて人の有無を探ると云ふ、又夜光る、丹後赤の海にて蛸と章魚と闘ひ、つひに蛸を海へ引入る、蛸傍の木にまきつきたれど、松の枝さけて引しづめらる、今に松残れりと云ふ、諸州にて大ダコ人を捕ることあり。

和漢三才圖會

章魚、海蛸子、章舉、和名太古

本綱章魚生南海、形如烏賊而大、八足身上有肉採鮮者、薑醋食之味如水母。甘鹹寒。按和名抄云海蛸子、和名太古、貌似人裸而圓頭者也、長丈餘者謂海肌子、蛸正作蛸、延喜式等皆用蛸字、蓋本草綱目錯別此一種、非章魚屬也。

章魚、狀似烏賊而大、八足疣多其疣凹壘色白帶微赤、煮之變深赤色、頭圓而白眼口在頸與足之交、無腹而腸在頭中、八腿交股之中間白皮中有如雙小鳥者、褐色其狀一如鴛鴦一如鴛也、章魚頭似囊肉薄、但足肉厚味亦美、然硬於鮑、而老齒不堪食、惟先以柔策數敲之、後煮之則肉軟、以薑醋食之、酒水等分以文火煮半日許、加醬油再煮則軟脆甘美倍常、俗謂關東煮。

凡取章魚以繩絆壺投水中、則久而章魚自入也、無大小壺一箇章魚一頭、北海乃大者多有、二丈許長足若人及犬猿誤對之、則足疣吮着、皮膚無不殺也、蛸性好芋、入田圃掘芋食、其行也怒目踏八足立行、其

頭如浮屠狀、故俗稱章魚坊主、最難死打、兩眼中間則死、又云章魚舌飢則食已足、故五足六足者間有。

石距 石拒、俗云手長蛸

本綱石距亦章魚之類、身小而足長、入鹽燒食極美也。

按蛇入江海變石距、人有見其半變者、故多食則食傷。

望潮魚 鱧魚 共出于閩書、俗云飯鮓

按望潮魚、狀類章魚而小凡五六寸許、其頭如鳥卵、頭中滿白肉、煮食其肉粒々如蒸飯、味亦然、故名飯鮓、足亦軟美、正二月盛出、播州高砂之產頭中之飯多、攝州之產無飯者相半至季春、則魚瘦而無飯、餘月餘無、東北海亦曾無之取之繫蠟螺空貝、投之則久而鱧入貝、此鮓亦頭與股中間如鴛鴦者有之。貝鮓 大如鮓魚而無飯、每一頭生貝中、其貝白狀似秋海棠葉形、日本紀私記云、貝鮓、和名加比太古、是矣。

蜘蛛鮓 似鮓而最小、頭如雀卵、加州越州有之、播州明石取之、乾送四方、以似蜘蛛名之、和名抄所謂小鮓魚、知比左木太古是矣。

東雅

海蛸子 タコ。倭名鈔に本草を引て、海蛸子タコ、今按鮓正作鮓見于唐韻、俗用ハ蚶子所出未詳、崔禹錫食經に、小鮓魚はチヒサキタコ、一つにスルメと註したり、並に義不詳タコとは、タは手也、コは猶海蛸子之子の如し、語助也、其手多きをいひしと見えたり、スルメといひ、カヒダコといふ、並に不詳即今烏鯛の類にスルメイカといふものあるは、其大なること、小鮓子の如くなるといひしと見えたり、今の如きは小鮓子をスルメといふ事は隠れて、烏鯛の名の如くにはなりたり、閩書によるに、石距一名八帶大者至能食猪、居石穴中、人或取之、能以足黏石拒人。といふものは、倭名の海蛸子今俗にいふ足長鮓也、章舉、一名紅舉、似烏賊而差大、味更珍好、といふは、倭名鈔の小鮓子、今俗にタコといふ是也。鮓魚一名望潮、腹内有白粒、如大麥、といふものは今俗に飯鮓也、其大小に隨ひて、各其名ありて、極小にして蜘蛛の如くなるものを、クモダコといふに至れり。一、新井白石

鮪の習性

鮪の上陸

私は昔から釣が好きで、常に海に出て居り、自分で釣つた魚はどんなものでも自分で處置します、例へば、棘のある魚や毒のある魚、齒の鋭く食ひつく魚や、ヌラ／＼して氣持の悪い魚でも何でも平氣です。然し鮪はどうも自分ではいぢれませんが。常に船頭にはづして貰ひます。鮪は薄氣味悪いですが、其の舉動や習性に興味を以て居り、常に自分でも深く觀察し又人の話を聞いたり、本で見たりして居ります。之から見たり聞いたり讀んだりしたものを纏めて申上げます。

昔から、鮪が海岸近くのかくの畑に来て、芋を掘つて食ふ話や、向ふ鉢巻で芋を掘つて居る繪をよく見かけますが、實際鮪が食物を求めて陸に上つて来るかどうかは、疑問でした。嘗て新聞か雑誌で見たのですが、秋田、山形縣の海岸地方では、働き盛りの男は、皆春にな

ると、殆んど皆北海道の鯨漁や鱒漁に出稼に行き、残るは老人婦女子であります。春過ぎ夏にならうと云ふ頃になると月夜に乗じて大小諸々の鮪が群をして、海岸近くの畑にやつて来て、農作物を荒すので、女房連が大舉して手に手に棒を持ち、隊伍整然、鮪の退路を遮断して之を撲殺し、魚市場に賣つて生活費用の一部とするさうです。最近私の友人で我國で最も鮪の繁殖を研究して居る兵庫縣の水産試験場長に鮪が陸に上るかどうか質ねましたら、陸には上らんと申して居りました。然し之れは私は見そこなつた最近の外國映畫で

すか、鮪が澤山砂濱に上陸して来て、又海に歸る時は波打ち際にたゞすんで居り、打寄せの大波に乗つて深い所に去るところを實寫したものがあつたさうです。實際、鮪は或る程度迄、陸に上るらしく、現に私は二、三年前に一度目撃したのは、東京灣の入口、横須賀沖にある第二海堡といふ昔作つた品川の御臺

場の様な砲臺が三つある、中央の砲臺の傍で、夏、月夜の晩に黒鯛、カサゴなどの磯魚を釣つて居た時、月明りに海堡の監視人らしき人が、防波堤の斜面に添ふて這ふて來るのを見受けました。此の海堡には防波堤の處に白く大きく四十間以内に近寄る可からずと書いてあります。多分防波堤に近よつてはいけない、

禁を破つて釣りする船を捕へんとするのだからと、注意して居ります。オイ沖の船頭さんと聲をかけた時、船の船頭はハイ何ですかと答へましたら、濟まないが魚を掬ふタマを貸して呉れないかと云ひました、船頭は何をするのかと聞きますと、今夜は防波堤に鮪が澤山上つてゐるが、早くて捕へられないからタマを貸して呉れと云ひました、此の人は手に釣の付いた棒を持ち、靜かに防波堤に上つてゐる鮪に近寄つて引懸けるので、既に腰に數匹の鮪をぶら下げて居る様でした。斯く鮪は大好物の磯蟹を追つて陸上に這ひ上つてくるが、外敵現はれるとなると、實に速に滑定して、海中に逃げ去るもので、どの位長く、陸上に居るかは不明ですが、胴の中にある鰓

が、海水で濡れてゐる間は、陸上に居ることが出来ると思ひます。現に私は沖で鮪を釣つた時、船の生簀に入れないで、船下の水の無い所に入れて置きますが、随分長く元氣よく生きて居りますから、夜分日光のない時、陸には相當長い間上つて居る事と存じます。但し陸でも餘り乾いて居る様な處には來られないだらうと思ひます。地面が露で濡れた様な時に上るのだらうと思ひます。

鮪と靴

鮪は魔物みたいなもので、陸上のイタチの様に僅かな隙間から逃げ去るもので、中にも手長鮪と來ると、化物の様でどうしてこんな處から逃げられるかと思ふ様な小さな隙間から逃げ去ります。斯う云ふ性質がありますから、鮪釣りの船頭は船の生間、即ち魚を生かして置く處から這い上つて逃げられない様に細かな目の網袋を作つて、釣つた鮪を入れ、口を絞めて、其の生間に入れて置く者もあります。

鮪は常に物の蔭や、岩礁のほら穴に隠れて、

足を一本出し波のまにまに揺らして置くと、

魚は之を餌と思つて、近寄るか、又は知らずに其の傍を通ると、急に足を延ばして之れに吸い付いて、捕食します。嘗て私は、横須賀軍港内で、夜、スキキを釣つてた時に、軍艦から落した靴を三個釣り上げた皆一匹づゝ鮪が這入つて居りました。又或時鰈を釣つて、大きなタイラギと云ふ貝殻を釣つたら、中に一匹鮪が居て思はぬ獲物を得ましたが、之等が皆鮪が靴や貝殻の中に潜んで居て、その近くに釣りの餌が通つたので慌て、中から足を出して、からみ付いた爲め、其の隠れ家に釣が引懸つて、不覺にも釣り上げられたのであります。

鮪壺

鮪が物の蔭に身を隠す性質を利用して、鮪を捕へる漁法に、鮪壺漁法と云ふのがあります、普通のマダコなら素焼きの壺、飯ダコならば、サマエアカカニの貝殻を、長い繩に澤山結びつけ、鮪のゐさうな海底に投入、一定の時間の後に引き揚げると、鮪坊主はよき

棲家と許り、中によい氣持ちで納まり返つて、

引き揚げられても壺から出ません、無理に引張り出さうとしても、吸付て仲々出ません。引張れば引張る程、益々強く吸い付きますから、此の壺から鮪を追出すのに、次の様な面白い方法を取ります、之れは地方によつて異なりますが、或る地方では、沸騰した鐵瓶の湯を一二滴坊主頭にたらすと、坊主はびつくりして飛び出します、次には其素焼の壺の底を爪でがり／＼搔くと、タスグツタツて這ひ出します、今一つは、前以て壺の底に小穴を穿つて置き、鮪が這入つてゐる奴を壺の外から息氣を吹き込むと、慌て、這出します。鮪は氣持ちの悪いものですが、一寸滑稽じみた處もあります。

鮪釣

鮪を釣るには普通大きな二本の釣の付いた仕掛の上に、蟹又は小魚をしつかり結び付けるか、又はサツマ芋又は大根の皮をむいて適當に切つたものを蟹と共に結びつけますか、又は豚の脂肪をつけて釣りますが鮪は芋をよ

く好む様です。之を海底に沈めて、船を静に漕ぎながら海底を曳いて行きますと、鮪は足でからみ付き重く手に感じますから、充分からみ付かして置いて、急に力強く合せると、二本のカギに引懸ります。そこで、一氣呵成に引揚げます。此の釣り方は東京灣の内外で行ひますが、備後地方では鐵棒の先にカギをつけ、十月から翌年の五月迄、晝間干潮の時沖に出て鮪の巢を探します。此の巢は一方は空穴に開き、他の一方から呼吸の爲め、水と共に土砂を吹き出してゐるので、鮪の居るのが解かります。其の鐵棒を穴の中に突き刺して見ると手應へで、鮪の居るのが知れますから、カギで引懸けます。

此の孔の深さは一尺五寸位です。

又鮪は夜間光りに集まる性質があるので、夜間引潮の時、沖で鮪の居さうな處で、松明をへサキで燃やすと、其の光をしたつて鮪の集まるのをカギで引懸けて捕る事もあります。

又鐵のカギの付いた棒で晝間干潮の時、鮪の巢を探して、其の巢の附近、五六寸位の所

を軽く突つくと、其の響で餌が来たのかと始め足を出し、次で身體全體を出した處を速やかに引かけて捕へます。

石見地方では、竹竿の先にカギをつけ其上に鮪の頭とホーヅキを結び付けたもので、岩の孔の鮪の居さうな所を探がすと、鮪はホーヅキの赤色に氣が付きて、孔を出て鮪の頭にカジリ付く所を引かけて捕へます。

陸中地方では麻ガラで松火を作り、夜間之で水面を照しながら、其灰を水面に落して流がすと、鮪は其光と臭ひを逐つて其處に集つて来るのを引かけて捕へます。

釣つた鮪が船の生間から、板子の上に這出すのを見て居ると仲々利巧なもので常に船頭の方を注意して見て居り、船頭が氣が付かなければ、ハイスピードで船縁から海に飛び込み船頭がニラミ付けると、動かなくなるさうです。尤も總ての動物は人間のニラミ付ける眼光には非常に恐れるもので、猛獸の熊でさへも仲々近かよらないと云ふ事は北海道で度々聞いた事です。

鮪の嘩喧

次に鮪の喧嘩に就て申上ります。鮪を釣つて生間に澤山入れて置くと、よく喧嘩を始めます。大抵の動物は同種類ならば、大きな奴が勝つて決まつて居りますが、鮪の場合は例外で、小形の奴が必ず勝つと云つてよい。喧嘩の時は八本の足の中、前の一二本は戦闘用、他は體を固定さす爲めに、船底に吸ひつく。而して互に戦闘用の腕を働かして、敵の漏斗水管、即ち口の様になつてる水を呼吸する處に、先に足を突込んで、敵の水呼吸を止めた方が勝つて、小形の鮪は行動が大形よりも敏捷なので機先を制して大きな奴を倒すのであります。時たま小さなのが大きなのゝ頭に、嚙り付いて、大きな奴を倒して居る様な面白い場面を見る事があります。斯いふ次第ですから、鮪船の船頭は、常に生間に注意して、喧嘩の仲裁をして、殺されて鮪の値段の低下するのを防ぎます。然し空腹で友食ひの食ふか食はれるの争になりますと、小さなのは大きな鮪の腹を満す資となります。又鮪は餌のな

い時は、脊に腹は代へられぬと云ふ理で自分の足を食ふが、半年位で再生するさうです。人間界で經濟社會に鮪配當と云ふ言葉がありますが、之れは或る會社が、利益がないに拘らず、利益のあつた様に装つて會社の金を株主に配當し、株價の引上げを策する事を鮪が自分の足を食ふのになぞらへて鮪配當と云ふ言葉が生れたのであります。實際沖に出て居りますと冬季、自然界に餌の少ない時は、足のたりない鮪をよく見かけます。

鮪の外敵

鮪は晝間は棲家に潜んで居るが、夜は棲家を出て海底を這ひ廻つて食餌をあさります。鮪の最も好む食物は、海老、蟹、貝類で小魚も勿論好んで食へます。晝間は岩窟や、岩の蔭などに潜んで居りますが、時に岩の上に出て、悠々晝寝をむさぼる事があります。此の時は便利な事には、其體色が、岩と同じ様に變じます。然し海底には、貪食魚類の石鯛、黒鯛、河豚、ウツボ類など、海の猛者が澤山居て、如何に骨なし鮪坊主が美味の肉塊であ

るかをよく知つて居るから、此の連中に見つかつたら最後、いくら墨の煙幕を張つて逃げても、泳いではとても魚にかなはず、大慨棲家に避難する迄には大勢の魚に頭や手足を食ひちぎられてしまひます。然し北方の海に晝でも海底を横行して食餌をあさつてゐるミヅダコと云ふ五十貫前後もある大鮪は、海底無敵と云ふ有様で、如何なる貪食の魚にも攻撃されません。

鮪の襲撃法

鮪は海老、蟹、貝類を非常に好んで食べますが、鮪は魚類の或物の様に強い齒を持つて居りません。其の齒は俗に云ふカラストンビで、強靱ですが、硬くはありませんから、獲物を噛み殺すと云ふ事は出来ないのです。強い八本の腕で絞め殺して食ふか、又はしつかり抱きしめて口から出す毒液を齒で注入して痺痺させて其の運動を弱らして徐々に食ふものであります。鮪が硬い貝殻を持つて居る貝類を攻撃する時は、鮪の様に岩に密着して居る者は其呼吸孔を腕の吸盤で押へ付けて、鮪が呼吸

困難で苦しくなり、貝が岩から少し離れる處を待ちかまへて之を引起して食ひます。

鮪の口中には二對の唾腺が開いて居ります。始めの一對の唾腺からの分泌液は、酸性を帯びた液で、第二對目の唾腺からの分泌液は、無色透明の粘液で、神經に對して激烈な毒作用を呈し、クラウス氏の實驗に依ると、蟹は此のエキストリトに觸れると直ちに死し、兎の靜脈に注射すると即死するさうです。之一八九九年Lo Biancoと云ふ人が鮪が餌を捕へる時に、唾液腺から強力な毒物を分泌し、蟹は此毒物で殆んど瞬間的に痺痺される事を發見したのであります。其の後、此の事實は多くの學者によつて確かめられ、一九〇五年、Lyron及びBeck氏の研究に依つて、唾液腺の毒物はアルコールに依つて沈澱し、加熱に依つて其の作用を失ふ物質、即ちトキソ、アルブミンである事が解り、後Henze氏に依つて此の毒物の化學的構造が、バラ、オキシ、フェニール、エチル、アミン即ちチラミンである事が明かになりました。(鮪の血液は、動脈血は青色を呈し、靜脈血は無色です、即ち鰓か

ら出る血液は青色で鰓に入る血液は無色です。

鰓が手ごわい敵を攻撃する時は八本の吸盤のある強い腕で敵を抱き締め、然る後食ひ付いて齒で此の毒液を注射して其身體を弱らし、おもむろに食ふのです。鰓は海老、蟹、貝類の養殖場では非常な害敵で、中にも眞珠貝の養殖場では常に懸賞金を出して、極力之の捕獲を奨励して居ります。

鰓が眞珠養殖場を襲ふ時は、非常な損害を與へますが、此の損害を養殖場で實驗した結果を見ますと、一匹の鰓が一晩に平均五箇乃至七箇の眞珠貝を食べるさうです。勿論、晝間でも食べますが、夜が一番活動が盛です。鰓が眞珠貝を襲ふ時は、どう云ふ風にすると申しますと、其の貝の閉殻筋即ち俗に云ふ貝柱と呼ぶ筋力が弱い時は、腕で強引に開いて中身を食べ、又貝殻に物がはさまつて隙間があると、此處から貝柱の處に毒液を注入して貝柱を麻痺させて開く。又貝が硬く閉ぢてどうにもならない時は、貝殻の貝柱のある邊に孔を掘つて、之から毒液を貝柱に注入して

開きますが、此の堅い貝殻に孔を掘るには、鰓の齒であるカラストンビは餘りに軟か過ぎて適きしませんから、此の時は第一唾液腺を利用して其の酸性唾液で貝殻の石灰質を溶解させるか、又は軟かくして、同時にカラストンビで其の溶解しない殘留物をはぎ取つて酸性唾液の浸蝕を助け、比較的速かに、孔を掘る目的を達します。一體一晩に一匹の鰓がどの位の孔をあけるかと云ふに、平均一夜に二三箇を開け、稀れに九箇位孔を開けるものがあるさうです。一つの貝に小孔を開けるのに二時間位かゝるものと見られて居ります。小孔を開けると、此處から毒液を注射し貝柱を麻痺させて貝を開いて其嘴で肉を食へますが、決して其の孔から肉を吸ひ出す事はないさうです。

鰓の棲息場

鰓の棲息所は鹽分の強い海水の中で、淡水の流入する川口や、鹽分の少ない海中には絶對に生活が出来ません。鰓の産卵場は陸に近い岩礁で其の産みつけられた卵、又は孵化した

小鰓が、其の時分降雨の量が多いと、死滅する事が多く、其の年は鰓の漁獲が非常に少ない。鰓は殆んど浅い海の岩礁に棲息し、英國での研究に依れば、五十種類の鰓の中三十三種は百尋以内、他は百尋以下の深海で捕獲されたさうです。我國でも春から秋にかけては比較的浅い海岸近くに、多く棲息しますが、秋の終りから冬にかけて、水温が低下すると、段々深味に下り深い處でないと釣れなくなり、尙、鰓は外洋性の海より内灣性の海の方に多く棲息して居ります。例へば伊豆半島沿岸などより東京灣の入口即ち内房州又は三浦半島、觀音崎近かくの方が、多く漁があります。

鰓の繁殖

鰓の生殖作用は、雄の鰓の八本の腕の或一本の先に、ヘリトコチラスと云ふ精虫が澤山這入つてゐる鞘が出来、これを雌鰓の外套膜の中に入れ、雌の卵が熟して、體外に出る時、其の精囊が破れて受精し、卵は一箇宛か、又は數多くの卵が集つて囊の中に包まれ、其の

囊の一滴が、岩石などに附着し、稀れに貝殻の中に付いてゐる事が有ります。又、鰓は卵を守る爲めに適當な石を運んで巢を作ります。

之れを鰓像と云ひ中に四、五匹も棲んでゐる事があります。此の巢の中に餌料となる動物が入り込むと盛な争奪戦が行はれます、又此の生み落した卵の傍を、親鰓は離れないで外敵を守り、且つ常に水管から、水を卵の上に吹きかけて新しい水を送り、卵の表面に汚物の附着するのを防ぎ、完全に孵化するやうに、努力するものであります。又親鰓は絶えず吸盤で卵塊の上をなでゝ居り、此れをやらないと孵化しないさうです。

鰓利用の漁法

海の小魚は鰓を非常にこわがりますから、浅い岩の孔などに棲息してゐる小魚などを捕へるに、棒の先きに鰓の足を結び付けて、岩の中を突付くと、鰓が來たと許りに驚ろき、岩の孔の中から飛び出す處を、網で捕へると云ふ漁法もあります。鰓を餌にして釣るには、瀬戸内海では、鯛を釣るに小形の生きた鰓を

使用し、又は普通の鰓の足を切つて用ひ、下ノ關では手長鰓を、明石では飯鰓を用ひ、又新潟縣でも福島縣でも使用し、イシナギを釣る時に鰓の足を使用する處もあります。福島縣ではアイナメを釣るに鰓の切身を使ふ事があります。

鰓の種類

鰓の分布は一ヶ年平均、水温攝氏十度以上の海で、淡水の注入しない、鹽分の高い海底に棲息し、普通温帯、熱帯に廣く分布し、日本でも最も多く、食用に供するものは、マダコと飯鰓で時に北海に産する水鰓と云ふ大きなものも食用に供します。日本で最も重要なマダコは日本から地中海迄分布し、外國では鰓は氣味が悪いので *Devil Fish* などと云はれ餘り食用に供せられませんが、地中海のイタリーでは、此の鰓を食用に供し、立派な鰓の漁法が存在して居ります。

日本に居る方の種類は四十餘種類位ありますが、普通食用に供せられるのは、先に述べたマダコ、ミヅゴ、イ、ダコ、の三種類位

です。

鰓の藝術

鰓は昔から藝術的に多く用ひられ、繪や俳句の材料にもなります。特に鰓が藝術的に扱はれて居るのは、東京目黒の鰓薬師にある北尾重政畫伯の筆になる鰓の額で、此本尊の薬師如來に祈願する者は鰓を食ふ事を斷つて、念ずる時は御利益あらたかとの事です。繪馬に鰓を描いたのが澤山あります。

又俳諧にも、抱一の作に、
飯鰓や頭そろへて何語る
芭蕉の作に、

鰓壺やはかなき夢を夏の月
と云ふのがあります。實際飯鰓を澤山釣つて生間に入れて置くと、頭をそろへて何か話してゐる様な恰好で、よく此の俳句が實際を現はして居ります。

鰓の食用

我國で鰓を食用に供しますには、關東より關西の方がよく鰓を食べる様で、殊に瀬戸内

海は鮪の名所で、中にも明石附近の鮪は一番美味で明石の兵庫縣水産試験場では鮪の繁殖に注意し、年々何萬かの鮪の子を孵化させて海に放流して繁殖の途を講じて居ります。南風が吹き初めると、瀬戸内海の鮪坊主が最も美味しくなります。夏の大阪を飾る傳統久しい住吉の太鼓祭の景物である堺大濱の魚市で、之は鮪の市と云つてよい位で、春の魚島の櫻鯛とも並び稱され、此の市では鮪が澤山賣買され、その夜の濱では、即席鮪犬、即ち鮪の天ぷらが大變よく賣れるさうです、骨なしの薄氣味悪い海底の怪物、鮪入道も研究をして見れば、相當面白い習性を持つてゐる愛すべきものであります。

——宮内左一氏——動物文學四〇——

章魚の戀愛

タコの戀愛には抱擁がない、イカはかの二本の長い觸脚を始め各脚を延ばして雌雄抱き合ひ雄は生殖脚によつて精蟲胞を雌の體へ移すが、タコは雄の右第三脚が生殖脚にて、他

脚と異りその先端部に吸盤がなく、鋭く尖つて内側中央線に縱溝が出来てをる、雄は雌に接近するも、お行儀よくやゝ遠方から此の生殖脚のみを延ばして、その先端を雌の外套腔内へ挿入し、精蟲胞を雌の體へ送るのである雌は間もなく産卵を始め直經二ミリの小卵を海藻等に生みつける。

◆……◆

章魚で寶を釣りあげる、昔朝鮮から貴重な陶器類や數々の珍寶を積荷して日本に向つた船が瀬戸内海において難破した、そして寶物は船員諸共海底のくぐと消えた、後日附近の漁夫は章魚に糸を結びつけて、難破船中へ下し、寶物をつかませて引揚げることに成功したといふことである。ここに潜水夫の役をした章魚は足の力の強いマダゴであつたに相違ない。

◆……◆

ミズゴは體の全長三メートルに達する大章魚で、北大平洋東西兩海岸に棲息し日本側では金華山沖から北方において極く普通に見

られ、米國側ではカリフォルニアヤサモントレイ灣まで分布してをる、味はマダゴに比して遙に劣つてをるが、體軀巨大にして數量も相當に多いから、經濟價値も少くない、赤く着色して醋酸づけとなし胴部や脚部が小片に切断されて市場に出されてをるのは此の章魚である。

◆……◆

米國博物館のポール、バルチュ氏はタコ、イカに關するグロテスクな記事を澤山集めて發表してをる、その中に、西アフリカ海岸を航海してゐる帆船が素敵に大きい章魚に襲はれた、其時二本の大きな足が水面からニュツと現はれて二本の柱へぐるぐる巻き着き足の先端が帆柱の先迄達したといふことであるから大したものです。乗組員の驚きは一方でない大竿を振りあげて早速巨大な足を断ち切つたので船は漸く顛覆から免れた。

——石川昌氏「たことい」——東京朝日——

◆ ◆ ◆

章魚六題

出雲のたこ島

たこ島、周り一十八里一百歩、高さ三丈あり、古老の傳に云はく、出雲の郡杵築の御崎に章魚ありき、天の羽々鷲掠り持ち飛燕來てこの島に止まりき、故、たこ島といふと、今の人猶誤りて杵島と號くるのみ、土地豊沃なり、西の邊に松二株あり、この外茅、莎、薺頭蒿、藜等の類生ひ靡けり、すなはち牧あり、陸を去ること三里なり。

蜈蚣島、周り五里一百三十歩、高さ二丈あり、古老の傳に云はく、たこ島にある章魚、蜈蚣を食ひ來て、この島に止り居りき、故、蜈蚣島といふ。

——出雲風土記——

蛸藥師

淨土宗の寺で、京都市京極三條大本山圓福寺中に在つて本名を永福寺といふ、本尊は確に彫つた藥師如來を安置し、俗に蛸藥師とい

ひ地名にも蛸藥師の稱がある。もとは天台宗であつた、昔此地に蛸屋の某といふ者があり、

其家の確から毎夜光を放つことがあつたので其確のつぼを掘出して見ると、其石に藥師の像があつたのでこれを安置したものである、即ち蛸屋に在つたものなので蛸藥師といふ、又一説に云ふ、此の確は抹香を搗くに用ひたものである、昔時比叡山の僧、母を寺中に養つてゐた處、其母病に臥し蛸を非常に好んだ併し寺の中の事として如何ともすることが出来ない、僧一日母の意にそむくことを怖れ、強ひて蛸を求めて寺に入らうとした、すると其時抹香を搗く確から藥師如來顯はれ、此の蛸を人目には經卷と見るやうにした、そこで人の咎むるものもなく、十分母の看護をするこゝとが出来た、よつて此の確を安置し、蛸藥師と稱するやうになつた。

——日本百科大辭典——

江戸にも目黒に蛸藥師がある、これは蛸を

断つて祈願すると、よく利益があるといふ、开で祈願成就の時は蛸の繪馬を納めることになつてゐる。

——江戸名所圖會——

忠臣藏の章魚

いか様此の九太夫も、昔思へば信太の狐、ばけ顯はして一獻くもふか、サア由良殿、久しぶりでお盆、又頂戴と會所めくのか、さしおれ呑むは、呑みおれさすは、てうど受おれ肴をするはと傍を有合ふ蛸肴、はさんですつと指させば、手を出して、足を戴く蛸肴、呑けないと戴いて喰はんとする、手をじつととらへ、コレ由良助殿、明日は主君鹽治判官の御命日、取分速夜は大切と申すが、見ごと其肴貴殿はくふか、たべるく、但し主君鹽治殿が、蛸になられたといふ便宜が有つたか、エ愚痴な人ではある、こなたやおれが浪人したは、判官殿が無分別から、スリヤ恨こそ有れ精進する氣微塵もござらぬ、お志の肴賞翫致すと、何氣もなく只一口にあなはの風情、邪智深き九太夫も、あきれて詞もなかりける

——假名手本忠臣藏七段目——

蛸船

蛸船とて薄き貝の如くなるを世に翫ぶ、尤大小あるは人の知る處也、本綱杯の類に見へず、良安が三方圖會に載たり、『按、貝蛸津輕處々北海有之、不時多出、或全不出、其螺大者七八寸、小者二三寸、黃白或純白、形似鸚鵡螺之輩、略如秋海棠之葉、有文理、可愛、中有小章魚、出兩手於殼肩、出兩足於殼復、爲擢竿之象、游行、故名章魚船、一歲津輕海濱數百成、群寄來焉、人多捕之、而怪無食之者、試煮之食、其犬爲煩悶、因知有毒物、棄章魚、取殼以爲珍器、然其殼薄脆不堪用。』近頃聞くに桑名侯先達て海防御用中、房州に領知ありしとき、老侯命じて領海の中よりの船に蛸の乗たるを其儘取よせ圖を作くられしを肥州請て寫す。今又茲に再寫す。

さればこの貝ありて蛸の寄乗するに非ず、造化の一物にて蛸と俱に生成する者なり、蛸の貝に就て用をなすは圖に於て知るべく、又この蛸に毒あるとは、三才圖會の文を見て戒

むべし、畢竟尋常の蛸とは別種のみ。

——松浦靜山——甲子夜話——

蛸船 又曰蛸枕

大和本草に云ふタコフネは貝大にして釣花入になる、海中にてタコ其上にのる、此物漢名不詳江槩なるべしと云説あり非なり。

本朝食鑑云、蛸枕狀類蛸蛸、一身五足、背紫黑腹白、俱有細文、内有小甲大者一寸餘、背青黑、有五路花紋、腹白有小口、沙石自入口非食、俗稱餅貝、如小團餅、亦一物也、又曰蛸枕、俗所謂蛸魚得此物、爲枕而眠、故名、是兒女戲謔也乎。

輿繼按するに蛸船は東國の俗呼んで葵貝とするもののみ、嘗て東海の一漁翁の言を聞くに蛸魚飲んでこの貝に乗ておのれを帆として波上を走らしむ、これを以て蛸船と名づく佐海越後の海に多し、東海には稀なりといふしからば兒女の虚稱にあらず、この枕といふは通稱にあらず唯食鑑にこれあるのみ。

——曲亭馬琴——耽奇漫錄——

百魚譜の章魚

ここに蛸の入道は壺に入りてとらるゝこそ

章魚の奇譚

七足の蛸

勢州飯野郡多屋村藤原村邊に七足の蛸ありて力あく迄強く甚だ智有りて大膽不敵の悪行をなして悪餌を食ふ故、土人はれを食せずと也、此の蛸の大きく成りし物陸へ上り、野三昧へ行く、新葬の死人を掘りうがち取行く事折節は有る事故、人又それを知りて打殺す事も有りとなり、人を取行く蛸と聞くとときは、北國筋又は出羽松前邊の東北海に居る如き一丈も二丈も有る蛸かと思ふに、左に非らずして漸く立ちたるところ三尺計りの蛸にて、尤も尋常の蛸よりは大なれども、五尺六尺にも成りたるものは見當らずと云へり、此の蛸夜更くるを待ちて二更過ぎより出て野墓へ來り新葬有れば葬所に建てし喪假竹を足に巻付て苦もなく引抜きそれより大地へひれふし、五つの足にて土をしつかりと掴み、残り二本の足にて自由に立て歩き其土を側へ運び捨て又

元の如く土を掴みては取除く、もとより海邊の事なれば、砂地にて地面も柔かなるよしなれども暫時に掘り穿ち棺を如何して破りぬるにや、遂に死骸を取出し、何の苦もなく海中へ持ち行く事とぞ、山邊の土地にて豺狼の新葬を掘抜きて死人を取行く事は常々の事なれど、それさへ珍らしきに、是れは僅かの中、蛸十五貫目も廿貫目も有る死人を取行く事は珍敷き事也、依りて此の地にては蛸の掘る事を甚だ嫌ひて専ら防ぎ事といへり、扱て此の蛸は至つて足早く其の上鼠の如くに人の隠れ忍ぶを能く知りて來らず、中々尋常にては打殺す事は出來ずとなり、去りながら、爰に一つの術有り、此の蛸は必ず來りし道ならでは歸らぬ故、人又それを知り居て、かねて蛸のあがりきたりし道を考へ、其の跡に糲糠を時置きて後、彼の三味より蛸を追出すと、蛸は眞一文字に元來し道を駆戻るとして彼の糠の中へ駆込み爰に至りて進退自由を得ず、悩む所

愚なれ、那智の瀧壺ならば文覺が行方をも傳ふべきを、一休の口にはほめられながら、まさなの法師の身の果かな。——横井也有——

クレタの蛸壺

西洋では章魚を悪魔の魚と稱して嫌つてゐるが、一方では此のグロテスクな形が却つて好奇の目を恃たせてゐる、その一例がクレタ土器類に發見された有名な蛸の繪の壺で、これに就きホール氏は曰ふ。

人はこのグルニヤで發見された有名なたこの壺を見て、驚嘆せずにはゐられない、大まきな「たこ」が眼をぎよろつかせて、疣だらけな脚をのたくらせながら、壺から飛び出して、まつすぐに私の方へ泳いで來る、そのうしろには岩があり、『うみえら』や、いろんな海藻が生えてゐる、すべて荒磯の岩間の光景でクレタの海邊のさまを想像ゆたかにあつてゐる、この蛸を見て、ナポリ水族館の水槽をのぞいてゐることを感じないものはあるまい。——氏義良による——

と、此の蛸壺は、最も古い蛸の藝術品の一つである。

を枇杷の木の棒にて打殺す事とぞ、枇杷は蛸には別けて毒なるよし、今三都のごとき市中に住みては、かゝる憂事は夢にも知らぬ人も多し尤も前にも謂ふ通り此の蛸は悪餌を食ふゆゑ若し漁人も自然に獵せし事有る時は、竊かに遠方へ賣遣す事といへり、能登越前にて蛇の化したる蛸は七足也とて是れをくはず、又蛇の化したるは九足有りともしへり、所によつて違ひある事にや。

——想山著問奇集——

大蛸牛を捕ふ

陸奥津輕領深浦といふ所、秋田領より大間ごしをへて此の國のふじといへる山を見んとて此の浦を過ぎて濱にいたりしに、モウ／＼と牛の聲しきりに聞ゆ、こは何事ならんと見れば、大なる牛これも野飼にして濱に放し置きし所に一疋の牛砂原に草を噛みながら眠り居りしを沖より蛸寄り來つて其の牛を海へ曳込まんとす、其有様は先づ蛸の形を見るに、天窓は大さ番袋へ風を入れてふくらしたるといはんや、よた甘端母衣を骨を張つて風に向ひし如く兩眼は摺鉢に鏡を入れたるありさま

色薄紫八本の足は大船の大繩を合せたるかと疑はれ牛の背中へ長き蛸の足を二本かけて、體を巻きて例の疣にてびつたり吸付き残り六本の大足には、大蛸中蛸いくつとなく寄り來りて足より足にだん／＼と鎖の如くに絡みつきて夫れより海原へ引入る體也、故に牛めざめて頻りに呻けど、蛸は實に恐ろしき大眼玉を剥出し件の二本の足にてぢり／＼しめつけ六本の足いからせ其の内三四本の足へは數百の蛸來りて絡みつき引くなり、牛は聲の限り吠ゆれども中々叶ひがたくぞ見えたる、おのれも三四十間高みにて始終を見居たり、時に獵師百姓商人のしや別もなく追々その廻りに寄集るといへども、蛸勢ひ次第に強くなることかなはず、既に浪打際まで牛を引付く時に大牛一身の力と見えてウ、ンと一聲天地にひびかしさげぶと見えしが、前足濱の砂地へ踏込みたり、これを見れば股の際迄入る、さて又大牛頭をひと振りふるよと見えしが例の角にて大蛸の頬のあたり目の際までつらぬけば流石の蛸もたまりかね、少し弛むと見えしを又牛一振りふりて蛸の大足根元をつらぬき

振切りたり、其中また四五尺の大蛸、大牛の背にのぼり、又二三疋の蛸、牛の後足二本を絡む、一番の大蛸は少し弱りしが残の大蛸追々來りて濱は一面蛸の天窓に砂地も見えぬ位なり、その中に深浦の人々色々物持ち來れども其側へはかきこみて得がてにぞ見えける、ここに長六尺ばかり左右の手は松が根の節の如き人物色は鹽釜松をもとときはにいぶせし如く眼はまなじり裂けて血ばしり、如何なる惡魔も逃ぐべきやうすに見えたるが、大手木提げて腹と腕とは肌見えぬやうにあら繩巻きて尤も腹を右の如くし、足は土ふまず繩巻きにして大牛の側近く寄れば蛸ども怒りて其の人を取らん吸付かんと二三十寄り來るを磨ぎすましたる大庖丁にて前を打切り左右を拂ひたまたま手足巻かんとすれば繩にて急に吸付き得ず、其内に蛸二三十疋二本三本づゝ切落せばかなはず、皆海へ逃げ入るなり、大蛸いよ／＼怒り急に大牛引込まんとするを此男早くそこへいたり牛をからみし大足を二本共に附際から切放せばかの大蛸も牛の角にて痛手を負ひをれば大に弱り、又二本の足を切落

されとも叶はじとやおもひけん、終に寄せ來る大浪の、なみ／＼ならぬ大蛸も荒磯をさりてしら浪と沖をふかめて逃げいにき、よつて残りの蛸ども又々沖に皆うせぬ、大牛はからき命を助り、大勢近づき牛主漸くひきて歸る其の後に、大蛸の二本の足の中々一人では持つ事不叶、魚入る籠中へ繩網などを入ることくしてもちかへる、我もあまり奇なること故其の夜は蛸の足切取りし深浦に宿りて、其の様子をきく見るに、一本の足は長さ一丈一尺ほど、一本は切りし所より五尺五寸程あり、廻り一本の足大釜一、大鍋に二三盃ほど中々十人廿人にては此の二本の喰ひ終るまじといひけり、さて／＼大なる蛸なり、此の二三十年のうちに牛の子一疋、並の牛一疋、都合二疋此の濱にて蛸にとられしと皆々語りき、然かあれば、かの大蛸は豫ねて牛を食ひ味ひ覺えをると見えたり、あまり奇なること故に之をしるしぬ。——周遊奇談——

大蛇と闘ふ大蛸

爰に丹後の國に奇妙なる松あり、一方は蒼

海漫々として際もなし、汀の方は青巖峩々とぞ聳えて苔なめらかなり、此の巖の上に彌々うへにありて、枝葉海の上へ投げかけたり、これいかんと申すに、近き頃の事なるは、六月半ばに大蛇の山よりいで、此の松にまといつきて、甲をほして遊べり、そのたけは十五六ひろもありぬべし、眼、くち際のすさまじさは、ものにとへん方なし、かかる所に海中より大なみこなみたて、勢ひ來るものあり、何なるらんと見ければ、そのあたまは一間四方をまろめたるほどなる蛸の八の手をうちかけ／＼大なみこなみおしきつて、此の巖のかたへ來りて大蛇をきつと見て、いかにして是れをとるべききしよくなり、大蛇は又この蛸を見て、とつてのむべきけしきなり、兩方互にねらひあひけるが、なにと思ひけるやらん、蛸はすこし退くやうに見えけるが、大蛇は飛びかゝる氣色にて頭をさしのべ手を出すところを、蛸はへた／＼と手を出して蛇を巻きけり、蛇は此の蛸の頭をくらひつかんと手をのぶる、しかれども蛇はこの松を五つまとひほどまとふ、蛸は又蛇を八つの手に

てひた／＼と巻く、蛇は蛸を巻きあげんとす、蛸は蛇を海へ引き落さんとす、蛸の力やつよかりけん、松ともに下へ引おとし、海へつひに大蛇を引きこみける、なかにては蛇をなにとしたるもしらず、松はこのとき、根をかへしけり、しかれども片枝のかたなる根のいさ／＼か岩にとり付きて、大木となつて枝葉さかえけり、よのなかに、たこといふもの大なるは有りといへども、かゝる大蛇を巻き込むほどの蛸はつひに我が朝にてき／＼及ばず、ある人のいはく、舟にあやかしといふものにつくときは、かいしき舟が動かさずして、何ともならすめいわくする事あり、そのあやかしといふは此のたこなりといへり、龍虎のしやうぶはありとむかしよりいへども、蛸、大蛇の勝負はまことに珍らしき物語りなれば、ここに記すなり。——總史集覽——義殘復覽——

手長章魚

石距は毒なり、此のもの蛇の化けるところといふこと、諸本草に見えず、雑家の書にもいまだ見あたらずといへども、或人西國の海

邊にて小蛇の己れと身を磯邊の岩に觸れて、搏ちつけたるを見しに、漸々に裂けわかれ、足の如く成りて水中に入りぬといへり、又予が隣家の人、先年筑前に下れる船中、中國浦にて磯の網にかゝりて揚りたる物を見待るに、頭は蛇にて、身はいくつにもわかれ、所々に疣ありて、章の魚の足に化り掛りたるを見しとて兩人共に其の後石距を食せず。——夜光壁——

章魚足の商ひ

天下の萬物は國々に依つて一樣ならず、去れば越後の村上には、章魚の全體を見たる人少しと云へり、其の子細は、村上の蛸は足一本の長さ九尺或は二間餘あり、疣の大さ大體盞を見るが如し足の末に至り、漸く疣の大さ希世留の吸物に似たり、故に魚類を賣買する者、僅かに蛸の足一本或は二本を求めて己れが見せ店の前につるし置きて商賣す求むる人來りて其足何寸何尺にて何程といふ直段を極めて買求む、大抵太き足一尺計りを求むれば十人計りの料理に用ふるに足れりといへり、希有の事なり。——雑話筆記——

蛇蛸と化す話

越後の刈羽郡なる海灣は、古歌にも八百日ゆく越の長濱とよみたる當國一の荒磯なり、この所、出雲崎に相つゞきて、東南は嵯峨たる海巖のつらなりたる、さながら刀もて削れるがごとく、西北は渺茫たる大洋にして、見るめも遙かに限りしられず、うち寄するしら波の推けてかへるすさまじかるべし、かねて聞くこの邊すべて沙濱にて、石地といふ漁村あり、抑も此の町は、海を面にし山を背にす、こゝには松多しといふ、この山につゞきて又松山あり、この山の根がたには、石の六地藏建たせ給へり、よつて里俗、この邊を賽の河原と唱へたり、これより松の林あり、この林のうしろよりして柏谷宮川と唱ふるかは、みなこれ峨々たる岩山なりこの岩山の前にあたりたる閻魔堂あり、そのうしろの岩を穿ちて閻魔の木像を安置せり、これより海邊又數町にして岩山の半腹に辨天堂あり、この天女堂の前なる磯の浪打際に男根石あり、土俗こ

れを裸石といふ、三四尺なる天然石にして鉛色なり。遠近の石女等、この石に禱りて子を求むることありといふ、されば石地町なる童子等は、年々の夏毎にこの濱に出で、水に戯れ終日遊びくらすこと絶えて虚日なしとなん。しかるにいぬる文化九年夏六月十六日、石地町なる民の子文四郎といふもの、(時に十五歳)その友だち兩三人とともに、賽の河原の海邊に出で、水をあみんとしたる折、石の六地藏のほとりより長さ四五尺なる蛇はしり出でけり、文四郎等これを見て、彼打ちころしてんといひもあへず、手に棒をとりて打たんとせしに蛇はたゞちに海に入りつゝ波を凌ぎて泳ぐほどに、文四郎等は衣脱ぎ捨て逃ぐるを追ふて水中のところ／＼にあらはれ出でたる岩角づたひに飛び越え、飛石、老會など呼びなしたる海岩をつたひゆきしかば、おつて岩のほとりに到りぬ、その時蛇は、岩角にしば／＼その身をうちつけしを、いとあ

やしと見る程に蛇の尾は忽にいくすぢにか裂けたるがそのほとりの海水はたちまち黄色になりしとぞ、さりけれども驚きおそれず、猶しも取りな逃しそとて、終にうち殺してけり、扱て引きあげてよく見るに、その蛇、既に蛸と變じ裂けたる處は足になりて疣さへはやしいで來たるに、頭もはじめの蛇に似ず、俄にまろくふくだみてさながら蛸に異ならず、只その色は白はげて聊も赤みなし、目を經ればあかみさすといふ、只そりかたちの異なるよしは、八足ならで七足なるのみ、さればにや凡この地の漁夫共の七足の蛸を獲ることあれば、こは蛇の化したるなりとてうち捨て、是を食はず、然れどもまのあたりに蛇の蛸になりぬるを見つるはいとめづらしとて、事あちこちに聞えたり、こゝをもて當年、かの地の一友人、ゆきてその蛸を見つ、且文四郎にその折の有さまをよく聞きて、地理さへ圖して家殿におくれり、よつて今その地圖を乞ひ得て、ちなみにこゝに載するのみ、予曾て越後の總地圖によりてしりぬ、この老會岩のほとりには、蛇崩と唱ふる處あり、且その邊に

ふかき淵あり、この淵のぬしは大なる蛸なり、又大なる龜なりなどもいへり、近ごろ漁者のむすめ、海苔をとるとて、こゝに來て、そのぬしなるものに引き込まれたり、死骸は終に出でざりしといふ。按ずるに龜もその性蛇と近し、いづれにまれ蛸の八足ならぬものをば、くらふまじき事ぞかし。

——瀧澤馬琴「夷園小説」——

諸預、鰻鱺に化すこと疑ひなし、鰻鱺、諸預に化すこと龍宮船に見えたり、又若州小濱の蛇は五月梅雨の時、海邊に出て章魚に化す此邊の人、常に其と知る處なり、常の章魚より少し異なる處あるが、人見分けて是を食せずと云ふ。

——佐藤成祐——中陵漫筆——

章魚の内に、あるひは蛇の化するもの有といふ、ある人の話に、越前にて大巖にふれて尾を裂たるが、つひに脚を成たり、其間時をうつせしといへりし、又併し僕も彼國の者にて、是は山より小蛇あまた下り來て水際に浸り、小石にふれ、漸々に化して水に入りたり

といひき、彼邊にては折々有る事ならし。

——伴蒿蹊——雨田耕筆——

四こく遍路したる人のいはく、四こくのうちに、雨のはれまに、みぎはのかたへいで、空のけしきいかにあるべきと、同行どもみる所に、あけ舟に乗りたり船頭の、なうたび人たち、はやくおはせよ、きとくなる事をみせんといふほどに、蘆はらを二三げんがあひだふみ分けて舟にのりてみれば、ながさ六七尺もあるらんとみえける大くちなはの、水中にてきり／＼とまふ事、よのつねならず、半時ばかりまふてければ、筒中とおぼしきところ、はうろくの大きさにまろくふくれり、ふしぎやと見る所に、又きり／＼まふほどにしばらくありて、あとさき二つづ／＼にさけたり、みれば手四つになりけり、それより又まふ事、や／＼しばらくありて、四つの手さけて八になりけり、めたくきする中に、このくちなは蛸となりけり、そのうち沖をさしておよぎゆきしなり、人々さてもふしぎなる事をみつるものかな、かゝることもあるならひか

やとて、よく／＼みおきて、物語にしたりけり。

——續史集覽——義殘後覺——

變化のきはまりなき事、覃子が化書に盡したれば記すに及ばざれども、蛇の蛸となる事は京師にては見る事を得ざる事にて、めづらしとするに足れり、長州などにては甚だ多き事なり余も是れを見及べり、本州大津郡多田の濱といへるは二里ばかり續きたる沙濱なり六七月の頃此の所を過ぐるに、一つの蛇山手より出來りて酔へるが如く痛めるが如し、波打際にはひ來り石によりて自ら體を打ちくだき苦しむが如く狂ふが如く後には身碎け血流れ死したるが如し、遠淺の波に洗はれ引汐にさそはれ稍深き方へ浮れ出づ、暫く見る内に肉腫れ爛れ白膜を生じ浪にゆらるゝ中再々に膜の如きもの脹れて遂に大なる袋の如くなるなり、其時傍人杖にてその袋の如き物を破るにはや足の形出來たり暫くする中全き蛸となり黒きものを吐き波にまぎれ、みるめあらめにかくれて沖の方へ行きぬ、始め蛇のはひ出るより全く蛸となる迄日永なる頃といへども二時に満たぬ程なり。

——ありのまま——

狂言『蛸』

シテ 蛸の精

ワキ 僧

アヒ 處の者

ワキ次第「我は佛と思へども〜。人は何と
か思ふらん、これは日向の國の者にて候、わ
れ未だ都を見ず候程に、此度都に上り候、道行
「筑紫人、そら言すると聞きつるに、〜我は
誠の修行して清水の浦に着きにけり、詞「急
ぎ候程に清水の浦に着きて候ふ、是なる卒塔
婆の陰に立寄り休まばやと思ひ候、シテ「な
う〜あれなる修行者に申すべき事の候、ワ
キ「あなたの事にて候か、何事にて候ぞ、シテ
「是は去年の春の頃、この清水の浦にて身ま
かりたる蛸の精にて候、なき跡申ふてたび給
へ、ワキ「不思議の事を聞くものかな、何とて
魚類の身を轉じ、などか佛果に至らざらん、
シテ「げに〜仰せはさる事なれども、漁師に
恨みをなす故か、うかみもやらぬ悲しさよ、
かまへて〜お申ひあれと、地「かきけす様

に失せにけり、〜、中人ワキ「扱々只今の者
は蛸の精なる由申し候、是なる卒塔婆に就い
て謂れの候ふべし、所の人に尋ねばやと思ひ
候所の人の渡り候か、アヒ「所の者とお尋は
誰にて渡り候ぞ、ワキ「是に立ちたる卒塔婆
は様ありげに見えて候、定めて謂れのなき事
は候まじ、御存じ候はゞ語つて御聞かせ候へ、
アヒ「其事にて候、去年の春の頃、播磨の國は
この清水の浦にて大きな蛸を引上げ申して
候程に、漁師も悦び又所の者共も是を料理致
し喰べて候が、かの大蛸化生となつて夜な
〜罷出で候程に所の者集りこの卒塔婆を立
て弔ひ申して候が、成佛仕りたると見えて其
後は出で申さず候さり乍ら今にも貴き人の御
通り候へば姿を見せ申すなど承りて候、お
僧も逆縁ながら弔うて御通り候へ、ワキ「懇
ろに御物語祝着申して候、さあらば立寄り弔
うて通らうするにて候、「重ねて御用もあら
ば仰せられい、ワキ「頼みませう、アヒ「心得

ました、ワキ「それ佛事は様々多けれども取
分き亡者の喜ばんと、中に妙なる心經の文た
ことくあのくたら三百三文に買うて、佛に奉
る、あゝなま蛸〜、一聲「あら堪へがたの
くやうかいやな、猶々弔ひ給ふべし、ワキ「不
思議やな人家も見ゆる晝中に、化したる姿の
現れたるは、如何なる者ぞ、シテ「是は昨日
の暮程に言葉を交し參らせたる蛸の幽霊にて
候なり、御弔ひの有難さに是迄現はれ出で、
候、ワキ「扱は昨日の暮程に言葉をかはす蛸
の精か、最期の有様懺悔せよ、跡をば弔うて
得さすべし、シテ「思ひ出づるもうとましや、
漁師の網に引上げられ濫皮も剥げよ〜と洗
はれて削立てたる蛆の上に、シテ「引据えら
れて後より、地「〜庖丁を押當らるれば眼
昏み息詰つて、うつぶきに押伏せられて、づ
をはいでぞ伏したりける〜、シテ「而して
起上れば、地「或ひは四方へ張蛸の、照る日
に曝され、足手を削られ、鹽にさゝれて隙も
なき苦しみななるを、妙なる御法の庭に出で、
佛果に至る有難さよ、只一聲ぞ生蛸とて、か
きふくやうにぞ失せにける。

烏賊の種類

烏賊魚、イカ、ゴイカ(熊野)、カウイカ(加
州)、コブイカ(雲州)マイカ、一名甘盤(水族
加恩簿)、甘盤校尉(同上)、黒魚(物名)、俞黝
河泊、白事小吏(同上)、海若白事小史(閩
書、事物紺珠に史を更に作る)、河泊從事(同上
鯨と同名)、烏則魚(山東通志)、鰓魚(名物法
言)、小史魚(通雅)、銀瓶魚(同上)、骨一名烏
側骨(本經達原)、海飄硝(官邸便方)、未起骨
(郷藥本草村家方)

イカは二三月より七八月に至るまで最多し
冬月尙あり、身は長大にして足は小也、形は
小囊の如く口は腹下足上に在り、雙眼口上に
在て相並び、八足短して珠あり、口旁に聚繞
ふ、八足の中間に白皮ありて雙黒骨を裹む、
小鳥の形の如し、故に俗に鳶鳥と呼ぶ、その
狀章魚に同じ、加州にてこれを採り風乾する
をあげほのと呼び、せんばからしと名て酒の
肴とす、八足の外に白鬚二條あり、長さ尺に
過ぐ、これをかくれあしと云ふ(中略)身に

淡黒薄皮ありて上に斑點あり、肉は色白く銀
の如し、味淡美なり、皮中に一骨あり、小舟
及び箸の葉の形の如く厚き三四分、輕虚に
して色白し、外は鮫皮の如く内は燒鹽を刮る
が如く重々紋あり、即ち海鰓蛸なり、俗名イ
カノカウ和方書に白龍と云ふ、腹に墨汁あり
墨の如し、味亦美なり。(中略) 越前加賀に
て肉を潤さ一分許長さ一寸許に切り、墨に和
し鹽藏す、イカの墨づくりと云ふ又、子腸を
鹽藏し食ふ、味極めて美なり、本草灌に烏賊
子腸有補腎之切と云ふ、烏賊は雨中に多く
出づ、故に豫州の諺に日ダコ雨イカと云ふ、
漁童竹梢を刮り尖らし岸上より窺て刺し捉
る、又小魚蝦を餌と爲して釣る、一種コブイ
カは形大にして味良しと大和本草に云へり、
雲州にては尋常の烏賊をコブイカと云ふ、一
種ミツイカは長くして縁ひろしと大和本草に
云へり、筑前の人は瓊管をミツイカ云ふ、
一種アヲリイカは常の烏賊より廣大にして障

泥の如し、肉軟に味亦美なり、閩書及福州府
志に烏賊大者曰花枝と云へり、熊野には常
の烏賊にも大さ六尺許なる者ありと云ふ、一
種ミミイカは身短く潤く左右に縁あり、赤黒
雜青色にして小米點あり、全身大さ一寸許、
夏月出づ、一種ヒイカ(蘇州)は身狭長二寸許、
足と共に淺青色、身に小青點あり、八九月に
有り(中略) 一種シシボイカ(蘇州)常の烏賊
の形にして小く、身淡黄赤色にして青黒斑あ
り、足は紅黒色なり、大さ五六分より一寸四
五分に至る、二三月にあり、他月には無し、
一種タツイカ(舟後)二月に甚多し、身足共に
長さ三寸これより小なるもの多し、色は淡
黒色なり、骨は常の烏賊に異らず、先全く燥
く時は骨自ら鍋中に陥落し墨と腸とは内に結
す、再煮て食ふ、稀に内に飯あるものあり、
一種ハリイカ(蘇州)體に横條あり。
柔魚、スルメイカ、スルメ(熊野)、シヤク
ハチ(同上)體赤斑あり後には白色となる、骨
無くして剃刀の如き狭細なるものあり、至て
薄く光ありて透徹す、これを銀ザサノハと云
ふ、此の烏賊を乾してスルメとす、常の烏賊

を乾せば、薄くして色黒味短なり、肥前の五島より出づるものは、形大にして上品とす、五島ズルメと云ふ、是はアフリイカを用ゆと云ふ、丹後但馬を次とす、加州にてはカウイカ(常の烏賊なり)を用てスルメとす、これを五島と呼ぶ、形圓にして肉厚く味佳なり、豫州吉田、石州津和野にて製するものは瑣管の大なるものなり、形狭くして長さ尺許厚くして味佳なり、一種サバイカ(大和本草)、は一名尺八烏賊(同上)、タチイカ(本朝食鱈)、ツ、イカ(同上)、タテイカ(勢州)、サスイカ(因州)、ミツイカ(筑前)、ヨシミツイカ、(熊野)、形狭長二三寸許にして竹筒の如し、煮る時は骨出て良光の如木を著するに似たりとて熊野の方言あり骨は柔魚と同じ、是瑣管なり(中略)一種ベニイカは一名ベイカ(備前備後)、ベカ(同上)、マツイカ(攝州)身狭く末微濶く縁あり、足と共に色赤し、足の末は黒し、骨はささの葉の如し、魚の大き二寸に過ぎず、八九月にあり是猴染なり。

—重修本草綱目啓蒙三十—

烏賊魚、此の類多し、コブイカ大にして味

よし、水イカ長くして縁ひろし、柔魚蘭書曰似烏賊而長、色紫、漳人晒乾食之、其味甘美といへり、是スルメなり、骨うすし、乾たるを多く食へば消化しがたし、凡そ烏賊性本草に益氣強志といへり、柔魚の性最然り、河豚鯉魚など一切魚毒にあたりたるにスルメの手煎じ服すべし、瑣管、スルメより小なり、長く骨うすし、食之柔軟、又サバイカと云ふ、アフリイカ廣大なり、障泥に似たり、やはらかにして味よし、小イカあり、凡そ烏賊魚無益人病人不可食、難消化肉餅として可なり、海鰾鮓はイカの甲なり、薬に用ゆ功能多し本草可考、世醫云ふ、久しきを整て用ひて尤もよし。 —大和本草—

螢烏賊

螢烏賊、一名まついか、螢烏賊科

體軀紡錘狀に延長し、胴長は六糎に充たず、鰭は箭根形にして長さは胴の凡そ半長に相等し、腕は不等にして長式は四三二一なり、鈎及吸盤ありて二列をなす、觸腕は胴長より短く、腕頭は長刀狀に膨み數列をなす、數多の

吸盤の他に二本の大なる鈎あり、雄の第四右脚は交接器にして尖端近く二縱褶ありて一溝を抱く、胴頭腕、總べての腹面に小發光器を鑲め腹面の尖端には三個の大發光器あり、強烈なる光を發す、眼球の周圍にも亦數個の發光器あり、本邦の周海に知られ深海の陸岸に接近する地方に於て多く漁獲さる、富山灣、相摸灣は其好例なり、産卵期は春なり、富山縣滑川町附近は本種につきて名高く、其漁獲高は市況を左右す、食料に供せらる、他に餌料又は肥料となる。 —日本動物圖鑑—

幽靈烏賊

幽靈烏賊、一名みづいか、幽靈烏賊科、體

軀甚だ柔軟にして透明なる寒天質より成る胴は長さ三〇糎に達し、後端部細く延長し鰭は圓形にて胴の後部に位するも其末端には達せず、頭部は圓筒狀を呈し長大なる腕を出す腕の長さは著しく不同(中略)眼球の周圍腕及觸腕に發火器あり光力強きを以て有名なり、太平洋、印度洋に産し本邦に於ては本州中部以南に知らる相摸灣に名高し。 —同書—

烏賊雜考

東雅

烏賊魚、イカ、倭名鈔に南越志を引て烏賊烏鯛鰾等、並に讀でイカといふと注せり、イカの義不詳大小また其類あり。

イカとは、イは發語の音にてカとは其腹内に甲あるをいひしと見えたり、凡甲殼あるものをよびてカといふ義下に見えたり、閩書に見えし烏鯛類、亦有數種、その柔魚似烏賊而長色紫、晒乾食之と見えしものは此にいふスルメイカの類也、瑣管或は云柔魚第差小爾といふは此にシヤクハチイカといふ類也、墨斗似瑣管而小といふは、此にクモイカといふもの、其小なる蜘蛛に似たるをいふ也、舜水朱氏はスルメとなるものは柔魚とも稍魚ともいふ、その骨細薄なるものなりといひけり。 —新井白石—

本書和名

烏賊魚 陶景注云鴨鳥所化也、崔禹云垂石

考

而浮鳥烏翔欲啄之回驚奉捕而放之故以名之。一名河神之使、出崔禹、一名河伯度吏小吏、出右今注、和名以加。 —深根輔仁—

大言海

いか、烏賊、語原知るべからず、倭訓栞「形もいかめしく、骨も異様なれば名づくるなるべし」肯はれば然れども神功攝政前記に中臣烏賊津使主と云ふ人を姓氏錄上左京神別上、中臣志斐連の條に、天兒屋根命十一世孫雷大臣とあり、尙熟考すべし、倭名抄に當越志を引きて「烏賊、常自浮水上、鳥見以爲死啄之乃卷取之、故以名之」とあるは字に就きての附會なり、説文「烏鯛魚」正字通「墨魚一名黒魚」とあり、鳥とは黒き義、腹中の墨を云ふなり、此物烏賊魚と云ふが成語なるべし。海産の軟體動物の名、體は圓筒狀の小囊の如く十脚ありて集り着く、八脚は短く其前端に吸盤あり、物に吸着する用をなす、二脚は頗る長く、尺餘あり、亦、先端に吸盤ありて

物を捕ふる用とす、口は體と脚との間にあり眼は口の上にある、總體灰色にして褐斑あり肉は白し、生食煮食すべし、味佳なり、一名眞烏賊と云ふ、スルメイカ、アフリイカ、尺八イカ、ヤリイカの類名と別ちて云ふなり、又烏賊の體中に墨液を含み居り、又一枚の骨あり、いかのくろみ、いかのくふと云ふ。

説文「烏鯛魚」字鏡「錫、伊加」天治字鏡、「鯛伊加」、本草和名「烏賊魚以加」、倭名抄「烏賊伊加」、賦役令「烏賊三十斤」、主計寮式「烏賊十斤」、語彙「古來、令、式等に載せたるものはスルメイカの乾したるものにして、中古來スルメと稱するものなり。 —大槻文彦—

和漢三才圖會

烏賊魚 和名以加

本綱、烏賊魚狀若革囊、無鱗有鬚黑皮白肉大者如蒲扇、口在腹下、八足聚生、于口旁、其兩鬚如帶甚長、背上有骨、厚三四分、狀如小舟、而兩頭尖輕虛而白脆重々有紋、以指甲可刮爲末、一名海鰾、亦鑲之爲鈿飾、又腹由血及膽正如墨、可以書、字但逾年

則迹滅惟存空紙爾、此魚過風波、則以鬚下
ノ疔、或粘石如纜故名、性嗜鳥、鳥每自
浮水上、飛鳥見之以爲死而啄之、乃卷取
而食之、因名鳥賊、過小溝、則形小也又云
此是本鶴鳥所化、今其口腹具存、猶頗相似。
肉、酸平、益氣強志、其墨能治心痛、以醋
服之。

海螺蛤 鳥賊骨能治婦人血閉不足症、一灸
黃入藥味鹹微溫、唾血下血又止痛多膿汁不
燥。

三才圖會云、鳥賊腹中有墨見人及大魚、
常吠墨方數尺、以混其身、人反以是知取
之。

按鳥賊形狀如上說、漁人以銅作鳥賊形、
其鬚皆爲鈎、眞鳥賊見之自來則羅鈎、蓋此
見已暈而慕乎姬乎、鳥賊亦頸之夾有、如鷹
鴉者。

柔魚 俗云太知以加又云鯊以加

本綱柔魚與鳥賊相似但無骨爾。按柔魚同鳥
賊而身大乾之爲鯊出於肥州五島者肉厚大
味勝、微炙火、(裂食則佳、切則味劣)、或不
灸細刻代膾皆甘美、柔魚魚骨亦似舟形而薄玲
瓏似蠟紙、無骨者不審、又章魚膊乾爲鯊。

(名乾章魚、而不稱須雷女)、古者是亦謂須
留女乎。(和名抄小蛤魚訓須留女)。

障泥鳥賊 大於眞鳥賊、四周有內緣狀、
以障泥(阿手里以加)是亦爲鯊佳。

龜甲鳥賊 背隆而肉厚、故名之。

針鳥賊 似眞鳥賊、而骨顯、尻碑、手如
針鋒、故名。

鑽管鳥賊 身狹長如竹筒、故俗名尺八鳥
賊。

雛鳥賊 鳥賊小者其大一寸餘頭中有飯者
亦有之、又名比之保以加、骨亦小、攝州播
州采之、味美蓋此自一種非鳥賊子也。(鳥賊
處々多有此者何少有乎)——寺島良安——

庖丁書錄

鳥賊、此の魚、烏をとらんとて水にうかぶ
を、烏ついまむとする時、是をまつて水に
入て食ゆへに鳥賊と名づく、海邊の人の云傳
へしは昔秦王、東海に遊ぶ時、算袋を海中に
捨つ、化して此魚となるがゆへに、魚のかた
ち袋に似て腹中に墨ありと申なり、是に鹽を
付てほしたるを明鯊と名づく、なまなからほ

したるを佳鯊と名く、是皆するめのことなり。

本朝食鑑

——林羅山——

集解江海處々每采之自春二三月至秋七
八月最多、冬月亦尙有矣、形如小囊、口在
腹十、眼在口上、八足聚繞口之旁、其八足
交腿之中間、有白皮包賊黑骨、如菱實之小、
或似小鳥小鶻、故俗號爲鳥、略與章魚同、
有白鬚長過尺、全體俱著淡墨薄皮、皮上
有斑肉、白如銀、味甚淡美、背上有甲
骨、狀如兒戲之小舟、又似箸葉、外如鮫皮
之白沙、內似刮燒鹽之賊、重々有紋、即是
海螺蛤也、鳥賊腹有墨汁、而如墨淋、古人所
謂鳥賊之血味亦美也、常喫腹墨、令水瀉墨
自漸、以防入害、然漁人識而網采、漁童尖
利竹稍、自岸上窺而刺之、又鯛好食小鯉
蛤及蝦、故作餌而釣之、一種有泥障鳥賊
者、腹背如障泥、比常之鳥賊、則稍廣大而肉
軟味亦勝美。——平野必大——

食物和歌本書

——平野必大——

鳥賊こそは鳥目の薬、蟲を殺し臍を取卷き
腹のいたむに。

隨筆に現はれた鳥賊

鳥賊の墨

一客有て夜話す、一人が曰く、我船にて海
邊を通るに、舟郎が曰く、希見事こそ候へ、
各々見物し給へとて船をとどむ、其の指す處
を見れば、大なる蛇、岸に臨んで水中を窺ふ
水中よりは、大なる鳥賊、岸に向つて蛇を取ら
んと勢ひあり、兩物間近くなりければ、鳥賊
波を吸ひ墨を嘔みて、彼の蛇にそぎかくれ
ば、蛇は斷々にきれて海中に落つ、見るもの
奇と感ぜざるはなし、其後、又他に往て夜話
す、客の曰く、近きころ或る人、鳥賊を料理
するに、彼もとより庖丁の業に疎ければ、鳥
賊をあらふ方をしらず、腹中の墨やぶれ、手
を添ふ所ことごとく黒く、殆んど種はてたる
折から、彼が兒、腹にさされたとて泣叫ぶ、
其の親、大に驚きあはて、彼の鳥賊を捨て走
り寄り、黒き手も厭はず、そこかこかとい
たはるほどに、此兒も眞黒になりて痛む所も

見えざるに、疼暫時の間に癒て、泣をとどめ
遊ぶ事常の如し、皆人不審し鳥賊の墨、腹の
毒を解すかといへり、此の兩人の話の聞くに、
鳥賊の墨、諸蛇の毒を解すること疑ひなし、
本草に鳥賊骨(海螺蛤)蝎螫疼痛を治とあれど
も墨の能を不載、姑く書して後人に備ふ。

——新井白蛾——牛馬問——

大鳥賊

享保十五年の春、江戸神田中島氏四五人と
催し、江の島參詣しけるに、江の島の獵師町
に大きな鳥賊を引きあげたりと騒ぎける、
よつてこれを見るに、長さ九尺ばかりあり、
斯かる巨魚もあるものか、漁人も前代そのた
めしあらずと云ふ、江戸へ送らばよき芝居物
ならんといひて通りたり、程歴て評して曰く、
肉はとも持つべからず、甲ばかりを求めな
ば、よき見物ならんと人々いひあへり。

——菊岡涑涼——諸國里人談——

大鳥賊乗込

大鳥賊乗込之議、承胤、上總國天羽郡金谷
村彦三郎、海中より取上候、古今稀成大いかに
而、右體之品中々人力にては漁事難相成、
趣御座候、足を縛り喰切られ浮む候由にて三
切に致し去月廿二日東小田原町一丁目尾張屋
次右衛門方へ乗込候旨、尤も其の節温泉にて
日數相立多くは腐候而取捨候に相聞申候、之
に依て別紙繪圖「入」御覽此段申上候以上

子十一月朔日

町奉行

猶以眞鳥賊、而者無御座候あをりをいかに
御座候哉、長さ二間半横六尺足之丸さ二尺程。
——續祝聽草——

消ゆる鳥賊墨

鳥賊墨をもて書きたる書、年を経れば消盡
す、雜劇本に(おそめ久松の淨瑠璃)鳥賊の墨
をもて書きたる書、消え失せるよしいへり、
續博物考に南越志曰、鳥賊懷墨、而知禮、江
東人或取其墨書契、以給人物、書迹如淡
墨、逾年墨消空紙耳と見ゆ。——松屋筆記——

『淵鑑類函』所載の烏賊

本草經曰、烏賊魚、骨治寒熱驚氣。

蜀本草圖經曰、九月烏鷄(音僕)入水所化、故義訓曰、寒鳥入水謂之烏賊。

炙穀子曰、此魚每遇漁舟、即吐墨染水、令黑以混其身、漁人見水黑則知是網之大獲。

南越記曰、烏賊魚有疇、遇風浪便虬前一鬚下

疇而住、腹中血及膽正黑可以書也、世謂烏賊懷墨而知禮、故俗曰是海君白事小史、或曰、古之諸生、常自浮水上烏見以爲死、便住啄之、乃卷取烏、故謂之烏賊、今正烏化之。

臨海異物志曰、烏賊之骨其大如楫、居者一枚作鮮滿器受五升。

物類相感志曰、烏賊過小滿少。

遊棄算袋於海、化爲此魚、形如算袋、兩帶極長。

夢溪筆談曰、宋明帝好食蜜漬魷、一食數升、魷、乃今之烏賊腸也、如何以蜜漬食之。

陳徐陵謝勳資烏賊啓曰、變膚庸臣伏增銘悚。

宋毛勝水族如恩簿曰、令甘盤校尉(烏賊)吐墨自衛白事、有肇宜授嘔嘔墨將軍。

烏賊の繪

烏賊をよく畫くのは竹内栖鳳氏で氏の烏賊は中々手に入つてゐる、古くは若沖の『游魚圖』の烏賊が有名であり、柴田是眞にも墨汁を流した烏賊の作がある、此の外現代では池上秀畝氏、『貝闕嬉春』の題下にこれを描き、中村岳陵氏は幽篁堂展に『春の海』と題して、游浮する烏賊の作があり森白甫氏には『魚のぞき』と題して同じくこれを畫き、根上富治氏にも『魚』と題してこれを畫いたのがある。鯛の方には澤山あつて一々枚舉に違もない。

雅俗稽言曰、舊說一名河伯、從事腹内有墨又名墨魚、暴乾者俗呼爲螟脯。

正享通曰、墨能已心痛背上獨骨厚三四分形如檣蒲子、而長色白輕脆如通草入藥名海螵蛸。

萬震海物異名記曰、集足在口縮、啄在腹形類蛙囊其名烏賊、喻波嘔墨迷射求隱。

酉陽雜俎曰、烏賊魚、海人言、昔秦始皇、東

くらげ

『くらげ』といふと、大分人間生活から離れたやうに考へられるが、わが國の最古文獻たる古事記の第一頁を見ると『くらげ』といふ語が出て来る、此の場合混沌として天地が定まらない状態を形容するのにこの動物にたとへたのであるが、歐洲では水母よりも更に下等の原生動物に屬するアメーバが混沌といふ語を代表してゐる。

學術語では水母はメヅーサといふが、それはギリシヤ神話に出て来るペルセウスに殺された魔女であつて、その髪の毛が毒蛇であつたといはれてゐる。水母にも種々の形があるがその内大振のものは觸手といつて、毒作用をする絲狀の物を澤山もつてゐる、恐らくメヅーサの名のついたのは、その觸手に因來するものであらう。

その形は一寸見ると、それこそ混沌として

げ

ゐるやうに見える事と思ふが、新鮮なものをよく觀察してみると、規則正しい四對稱か八對稱をしてゐるのである、水母といつても疊二疊以上もある大きいものから、一センチには達しないやうな小さいものまであるが、普通我々の目に觸れる盤狀の傘をもつた鉢水母といふ仲間では、前のべた觸手の他に口もあれば胃もあり、循環系の役目をする器官や光線を感じる眼、體が倒にならないやうな平衡器、その他生殖器などをもつてゐる、然しこれらの器官は動物が簡單だけに、その構造も我々が日常目に觸れる高等な動物の各器官とくらべるとその構造も機能も共に簡單なものである。

觸手はその軸にある筋肉のそばに長く伸びたり縮んだりすることが出来、それで小動物を捕へて口へ運ぶ役をする、口は下側にあつて唇の長く伸びた四本の口腕の中央にあつてその奥は直に胃となつてゐる、ここで消化さ

れたものは水母の體一面に擴がつてゐる消化循環系を通つて各部分の榮養の爲に運ばれて行くが、消化されなかつた殻はまた以前の口から體外にだされてしまふ。

次に運動は體の下側に發達してゐる筋肉で體全體を丁度傘をつぼめたり、ひろげたりするやうにして收縮運動をして泳ぐことが出来る、また水母を海の中で倒にしても直ぐに正しい位置に戻つてしまふが、之はその傘の縁の各八分目毎に一つ宛ある平衡器のためで、その器官には耳石といふ結晶體があつて、それと神經の作用で高等動物の場合と同じやうに重力に對して正しい位置を保つのである、若し試にその八個の平衡器の部分を取り除いてしまつて、倒にして置くと、正しい位置にかへらないでゐるのを見てもその作用を知ることが出来る。

眼も平衡器のある部分に通常あるが、その構造は簡單なもので、唯明るい暗いを感じる程度のもので物の色彩や形などは勿論識別出来るものではない、水母がよく日中には見えなくても夕方になると群つて來ることのある

ものは、太陽の光の強弱を感じてゐるからであつてその場合に應じて自分に都合のよい明るさの方へと向ふのである。

『二』

水母の發生は世代の交番のない例として屢々擧げられるのであるが、卵が受精すると、だん／＼發達してプラヌラといつて表面纖毛で被はれた細胞の塊となり、數日海の中を泳いで後、海草、岩石或はエビ、カニの身體などに附着して觸手をもつたポリプとなる、そのポリプは微生物をとつて次第に發達して大きくなりコップ状のその身體に數箇の横くびれができ其のくびれが深くなつて行つて水母の幼形のエフアイラといふものが丁度皿を重ねたやうに數個できてくる、このやうにして出來たエフアイラは次第に上の方のものから離れて泳ぎだしてくる。

この時分はまだ身體が小さく漸く一ミリ位であるが、それが食物をとつて段々と成長して來ると人目につくやうな大きい水母となつてくるのである、このやうに水母の時代には卵子と精子が出來て有性生殖をやるが、ポリ

プの時代には無性生殖の横分裂をして繁殖するので、交互に有性無性の生殖をやるので世代的交番の適例として擧げられてゐる、併し一生浮游してゐる水母の中にはポリプの時代がないものもあるもので、どの水母もいつも世代的交番をするものとはいへない。

普通だれでも水母は海の中のみにあると考へるかも知れないが淡水にも稀ではあるが棲息してゐるのがある、淡水水母は一八八〇年に始めて倫敦の植物園のタンクの中に發見されて非常に珍しい事實に思はれたが、其後歐洲、アメリカ等の各地で發見されるやうになりアジアでも楊子江には多産することが知られ我が國でも津市の井戸で發見されるやうになつた、然し其の井戸は火事の際消火のためその井戸の水をほつた爲に水が洒れたとか聞いたから、同一場所では再び發見することは一寸困難かも知れないが、その附近をよく探せばゐるのではないかと思はれる。

普通の水母は泳ぐものであるが、北方に多いアサガホクラゲや十文字水母などは一生泳ぐことなしに海草に固着してゐる。

水母は其九〇パーセントは水であつて、これはやすい體をしてゐるが、案外に丈夫なものであつて放射狀に正しく切りはなすと各部分が生きてゐて失つた部分を再生しようとする傾向がある、勿論身體の一部分を失つた位では死ぬことはなく、次第にその失つた部分を再生してゆく、あまり高温には堪へることが出來ないらしいが、低温には相當抵抗力があつて、ある水母では水と共に水母を凍したことがあつたが、その後温めて水がとけてくると水母も又泳ぎ出して來たといふ事實もある。

水母の食物としては主として海産の小さい甲殻類環形動物軟體動物幼形等であるが、アンドンクラゲ、赤水母などは相當の大きい動物を捕食し寸餘の小魚などを胃の中に入れてゐる事がある、又水母お互同士食合つてゐるやうな事もよく觀察される、食物をとる時はいつも觸手を長く伸し、それについてゐる刺胞で麻痺させてから口へ運ぶのである。

『三』

水母の大きいものが何もない大洋に浮んで

ゐると、恰も炎天の下の大樹のやうに、其水母の傘の下には色々の小動物が付着したり群泳する事が見られる、附着してゐるものには蝦の小さいものなどがよく見られるが、魚の幼形がよく水母の下に群つてゐる、又傘の上には時によると磯巾着の小さいものが附着したり烏帽子貝が生へてゐたりする、之等の小魚や小蝦などは、別に害のないものであるが、

時によると水母の體を少し宛食する者もある、又水母の寒天質の中には、下等な藻類がよく入つてゐて、藻類自身はその宿をかりる代りに藻類の葉綠素によつて炭酸瓦斯を分解して酸素を遊離させるので、水母の呼吸作用に役だつといはれてゐる、これ等の水母は章魚水母のやうに其體が褐色をしてゐるのが特徴であつて、曇つた日にはあまり水面近くに浮んで來ないが、天氣のよい日などによく見かけるのは、其の共生藻類の同化作用のために好都合のことであらう、夏の海水浴において水母は恐れの一つであるが、刺す水母は限られた種類だけであつて、大抵のものは觸手があつても人體に無害であると見て支障な

い。概して糸狀の觸手を一尺も或はそれ以上も長く伸ばしてゐる水母は刺すと見て用心する方がよいと思ふが、觸手を長く伸ばしてゐないものは、無害と見てよいと思ふ、然し一概にさうきめるわけにもゆかないので瀬戸内海に多産する幽靈水母などは觸手を長く伸ばすが全然害はない。

害のあるもので一番ひどいのは鱧の烏帽子といつて、紺碧の美しい水母で、空氣の入つた浮囊を水上に浮べ、觸手を長く海水に垂らしたものであるが、これにやられると非常に痛く人に依つては數日臥床しなければならぬ、この水母は外觀から見ても直ぐわかるが、いつも黒潮にのつて來るので、特に潮の満ちてくる時、注意してこの水母が見えなかつたら先づ大丈夫と思つてよい、然し潮加減によつて今日見えなくても、明日は黒潮が近づくことなどあるので氣をつける必要がある、勿論引潮の時は比較的安全である。

又、赤水母といつて傘上に褐色の放射狀の模様のあるものがあるが、これも其の觸手にあたるるとひどくやられる、然しこの水母は太

平洋岸では主として四五月に多いので、七月八月になると減つて來る、然し北方や日本海方面では七八月頃にも多産することがあるらしい。

『四』

九州方面では天草水母といふのが、やはり七八月頃有毒である、行燈水母といふ無色透明の立方形の水母も多少毒はあるが、前述に比較するとその毒も烈しくなく、その出現時期が主として八月から九月にかけ、九月に一番多産するので、海水浴の人々には比較的害は少い。

瀬戸内海にゐる行燈水母で、ヒクラゲといつて大きなのがゐるが、これはその毒も激しく、然しその出現期が十月十一月頃なので漁夫以外の人々はあまり害を受けない、ヒクラゲといふ名も「火水母」であつて、その毒によつて光るからである、その他、水母形ではないが紀州の海岸には水母のポリプ時代のもので、イラモといふ種があり、それに觸れると毒が烈しい、日本海の北方や、北海道方面には、有害の水母が非常に少ないが、ホンダ

ハラの中にゐる鍵の手水母が刺すといつて恐れられてゐる。

水母は人を刺す以外に、小魚を捕食したりなどして害を興へるが、また漁夫の網に大きな水母が澤山かゝつて魚は入らずその重さで網を破つてしまうことなどがある。

又、一方人生に與へる利益としては非常に僅なものであるが、瀬戸内海から九州方面に産する備前水母は昔から食用にされ柏の葉と共に壓搾して保存し食ふ時に灰で揉んで臭氣を去り、酢などにつけて食膳にのせられたものであるが、今では明礬水につけて保存し、食ふ時に湯をかけ柔かくして食べる、特に支那料理では大抵水母は出て来る。

食べると非常にかたくて其の齒ぎれの所が陸上のキクラゲを偲ぼしめるが、キクラゲの名稱も恐らく此の點からで、木にある水母といふ意味であらう。

勿論水母の中でも食用となるものは大形のもので比較的寒天質の硬いものであるが、數寸の寒天質を壓搾して薄くするので、水分が出てあのやうにコリ／＼するのである、此の

水母の保存は「しば漬」といつて、瀬戸内海などで行つて他地へ賣り出してゐる。

食用以外の用途としては、幽霊水母、越前水母などを餌料に用ひてカハギや鯛などを釣ることがある位なものである。

自分の知るかぎりでは、水母に關して次のやうな仲正の和歌がある。即ち

わがこひは海の月をぞまぢわたるくらげも骨にあふせありとは

水母の骨のないことは、この歌から知られてゐたのであるが、最近の研究によれば、章魚水母などには硬骨はないが、軟骨に似た組織があることが知られてゐる、然しその骨の有無はとも角として、今時このやうな戀歌を貰つた女性があつたとしたならば、果してどのやうな氣持でよむことであらう。

——内田亨氏——小さな世界——東京朝日——

海月の傳記

昔天竺に海月の夫妻があつて、その妻が懷妊して、猿の生臍が食べたいと言ひ出した、

夫の海月は妻の願ひをかなへてやるべく、いろ／＼と考へたが、此方は海のもの、あちら

は山の動物中々思ひが達せられさうにもないある日夫の海月はふらりと海岸を遊いでゐると、岸の樹上に猿が見えた、そこで海月は猿に向つて、「一つ龍宮に案内するから私の背にお乗りなさい」と言つた、猿は何心なく、海月の背に乗ると、海月は得たりと猿を乗せて沖へ出てしまつた、時分はよしと海月は猿に向つて、「實はお前をここまで連れ出したのは、妻が猿の生臍を食べたいと言つたので、こゝまで誘ひ出したのだ」といふ、猿は非常に驚いたが、さあらぬ體で、「イヤ、それはお氣の毒だつた、實は先の樹の上に生臍を置いて來たから、取つて來やう、あの島まで一度乗せて行つてくれ」と言ふ、海月は愚かにもそれを信じて、島まで戻ると、猿はヒラリと海月の背から、樹の上に飛び移つて逃げ

てしまつた。——祖事庭苑——類聚和名抄——

此の傳説一には龍宮の姫の病の爲め海月が使者に立ち猿に逃げられたため骨を抜かれることになつてゐる。

海月の詩と歌

錢塘賦水母 宋沈與求

疾風吹雨回江城、鱸牙嘔嘔潮欲平、
容居喜無人事櫻、相與環坐臨前楹、
眼中水怪狀莫名、出沒沙嘴如浮嬰、
復如笠緇絕兩纓、混沌七竅俱未形、
塊然背負群鰕行、嗟其巧以怪自呈、
凝目憊祝相將迎、老漁旁睨笑發聲、
曰此水母官何驚、江流如奔絕滄瀛、
潮汐往來月爲程、藏納衆汚無滿盈、
浮埃沈滓瀕九清、結成此物宜昏盲、
便鰕導迷作雙睛、乃能接迹蚌與蠃、
亦猶巨蜃二體并、離則無目爲光精、
江天八月霜葉鳴、罍師得鰕洪水征、
水母棄擲羅縱橫、試令收拾輸庖丁、
絳馨收涎體紆縈、飛刀縷切武火烹、
花甌釘鉅粲白英、不殊氷盤堆水晶、
稻醴盪寒菘香橙、入齒已復能解醒、
遣漁上矣勿復評、嗟哉此性愚不更、

定矜故態招三鼓、且摩捋腹甘藜藿。

——佩文齋詠物詩選——

海蟹詩

之謝宗可

層濤擁沫綴鰕行、水母含秋孕地靈、
海氣凍凝紅玉脆、天風寒結紫雲腥、
霞衣褪色水涎滑、瑤縷烹香酒力醒、
應是楚宮萍實老、誤隨潮信落滄溟、
水母目蝦賦 唐揚濤
物有相感動、無不濟嗟水母之不明、假蝦
目而能睨、因依倚以自警、當行止而有制
荷、茲盼睇非惟一目之所加遊、彼彼瀾固
亦兩心之潛契。

水族加恩簿

宋毛勝

令爾借眼公、受體不全兩、相籍賴宜授、
同體合用、切臣左右御駕海將軍。
註、借眼公、水母也。

◇海月の歌◇

家集戀

我が戀はうみの月をぞまぢわたるくらげの
ほねにあふ夜ありやと(未木)源 伸 正

くらげを海の月といふよし
人の申しけるを聞きて

ふかくすむちひろのそこもみるべきにくら
げに見ゆる海の月かな(後葉)祭主親定母
世にからく汐路たゞよふ海月にもわれよく
似たり住家なれば 與謝野尚綱
おもひなげに海月ら浮ぶあけぼの、春の入
江の濃緑の波 佐佐木信綱

席上花袋先生

海月の酢の物かみしめたまふ口もとや兩頬
にかけてたぶ／＼と動く 土岐善麿

此の浦を遙かに見わたして行けば、海
松は浪の上に根を離れたる草、海月は
潮の上、水に移る影、ともにこれ、浮
生を論じて人をいませしめたり。
波の上にとゞよふ海の月も又うかれ
行くとぞ我を見るらん。

——海道記——

章魚、烏賊、海月の俳句

長々と章魚も伸する春の海 附鳥
 生蛸や納屋が柱のぐみ袋 抱一
 手の章魚も出るや吉書年の海 令徳
 祭の蛸祭の蛸と呼んで行く 寒月
 春蟬や蛸賣越ゆる志摩の山 蝶衣
 岬傳ひ章魚突き舟の麗かな 佐草人

蛸壺やはかなき夢を夏の月
 章魚壺や昨日となりし淡路島
 章魚壺の口いつばいに春日かな
 章魚壺に附くほづきや春の潮
 章魚壺を海月のなかに沈めけり
 章魚壺に水あるまゝの汐干哉

櫻鳥賊
 提灯に吹く風寒しさくら鳥賊 蝶衣
 烏賊船の燈點々と浪がくれ 凡水
 烏賊干す 地燭
 磯の松に縄めぐらして烏賊干しぬ
 海月 王樹
 大くらげ船より煙草投げにけり
 夫水等に海月見下す暇かな 同
 夕風やのどかに浮ける大くらげ 草城
 春の潮あるは海月を打ちよする 秋双
 行く春や海月の育つ潮の癖 柑子
 潮波みの手桶に這入る海月哉 静緒
 横さまに海月流るゝ潮かな 虚子
 夕風に海月の海となりけり 筑紫郎
 春風に海月の浪の激みかな 九朴
 海月取り 雨銘
 櫓を押すも眠たさうなり海月取り 雨銘
 海月取り 禪古き浪がしら 癖三醉
 鯨の潮經の烏帽子流れけり 泣人

章魚

章魚壺

烏賊

海月

飯蛸

飯蛸の可愛やあれで果るげな 來山
 飯蛸のおのれ足食ふ河内越 沾徳
 飯蛸のひとつに成るや月の影 天外
 飯蛸や頭そろへて何語る 寛水
 飯蛸や雛の御所にも召さるべし 貞雅
 飯蛸や高砂の浦の賣れ残り 青々
 飯蛸に夫婦あるこそおかしけれ 天籟
 飯蛸に濱豌豆のさかりかな 蘆仙
 飯蛸や丸山のさくら咲く 羊我
 飯蛸の飯より多しあそぶこと 乙二

俎板に下手がやぶりの烏賊の墨
 肥えて來し烏賊の甘味や濱泊り
 簞消して烏賊船かへる夜明かな
 墨吐いて烏賊は己れに汚れるる
 貧乏な烏賊の黒みに片男波
 俎板や青葉で拭ふ烏賊の墨
 あさましく小鯛よぐれぬ烏賊の墨
 墨吐いて烏賊の死し居る汐干かな
 庖丁の水のぬるみや烏賊の墨

月斗 月斗 月斗 月斗 月斗
 月斗 月斗 月斗 月斗 月斗
 月斗 月斗 月斗 月斗 月斗
 月斗 月斗 月斗 月斗 月斗
 月斗 月斗 月斗 月斗 月斗

藝術資料 第四期 第七冊 要目

龍 蛇

口 繪

海北友松筆 龍之圖(原色版)
 橋本雅邦筆 龍之圖(琥珀版)
 陳竹翁筆 龍圖
 牧谿筆 龍之圖
 華嚴緣起繪卷の龍
 圓山應舉筆 龍之圖
 俵屋宗達筆 龍之圖
 高山寺鳥獸戲卷之龍圖
 狩野探幽筆 龍之圖
 法隆寺蜜陀繪之龍
 朝鮮賢寓里古墳壁畫之青龍
 埃及蛇王之石額
 希獵彫刻フオコーンの蛇
 尾形光琳筆 蛇之圖
 菱川宗理筆 蛇之圖
 幸野模嶺筆 蛇之圖
 竹内栖鳳筆 麗陽
 西澤信敬筆 蟲類百姿の蛇
 蛇 (中西悟堂撮影)
 古代龍之圖(扉)

本文

龍の概説
 支那に於ける裝飾の龍
 龍の故事成語
 龍の名作
 竹取物語の龍
 漢詩の龍
 謡曲中の龍
 里見八犬傳の龍
 龍と神仙
 龍の歌 龍の俳句
 東遊記の登龍、龍鱗
 龍を見た話
 蛇の概説の種類
 國文學中の蛇六題
 小松内府と蛇(平家) 大蛇の末盛
 衰記) 大蛇と名曲(著聞集) 蛇嫌
 の春家(今昔) 頭に矢の立つ蛇(沙
 石) 徒然草の蛇
 古今著聞集の蛇
 蛇性の姪(雨月物語)
 道成寺縁起
 常陸風土記の蛇
 八岐の大蛇とエデンの蛇
 舞曲の蛇 彫刻の蛇
 繪畫の蛇 俳句の蛇
 兩頭の蛇

後記

◇藝術資料第四期七冊は爬蟲類の豫定であります、會員諸氏から「龍」の項を加へよとの聲がありましたので、爬蟲類中に加へました併し龍は理想の動物ではありませんが昔から文獻が非常に多いので、龍丈けでも優に一冊を損めるだけのものがありますので、藝術に交渉の少ない他の爬蟲類を割愛するの止むなきに到りました。
 ◇龍に次ぐの蛇を以て、十二支の何れもが藝術資料の中から求め得られるやうになりました。併せて十二支に關係ある各冊をも纏めて注文に應ずる計劃を立て、居ます。御利用下さい。
 ◇本輯の章魚、烏賊、海月の軟體動物篇も、恐らくこれまでに無かつた集成と自信致します、殊に章魚に關する藝術に就いては相應に面白くも集めたと思ひます。
 ◇次の冊は兩棲類ですが、これもいろいろと資料の蒐集便宜上、蛙、蝸牛、蛞蝓の三種といたしました。相應澤山の文獻や資料があるかも知れませんが、これも前冊に劣らぬ豊富な資料を以て見ることが出来ると思ひます。
 ◇時下酷暑の候會員諸氏の御健康を祈り申し上げます。

藝術資料 第四期 第六冊 (毎月一回二十日發行)

會員外及分賣 定價 金壹圓五拾錢 郵税金九錢

| 會費 | |
|-------|--------|
| 三ヶ月 | 金參圓六十錢 |
| 六ヶ月 | 金七圓 |
| 一ケ年 | 金拾四圓 |
| 共 稅 郵 | |

三ヶ月以上御拂込の方を會員と致します御申込は必ず前金に願ひます。振替口座東京四四二四七番か京都一四〇八番芸艸堂宛何れか御利用のこと。爲替は受取局を無指定として、切手代用は必ず一割増の事。既納會費は拂戻の請求に應ぜず。

昭和十五年七月一日印刷
 昭和十五年七月十日發行

編輯者 金井紫雲
 發行者 山田直三郎
 印刷者 須磨勘兵衛
 印刷所 京都市下京區西洞院七條南人
 内外出版印刷株式會社

發行所 合名 芸艸堂
 京都市中京區寺町二條南(電話上二九〇番)
 東京市本郷區湯島一ノ一(電話下三六〇番)



行刊堂艸芸會合
社名